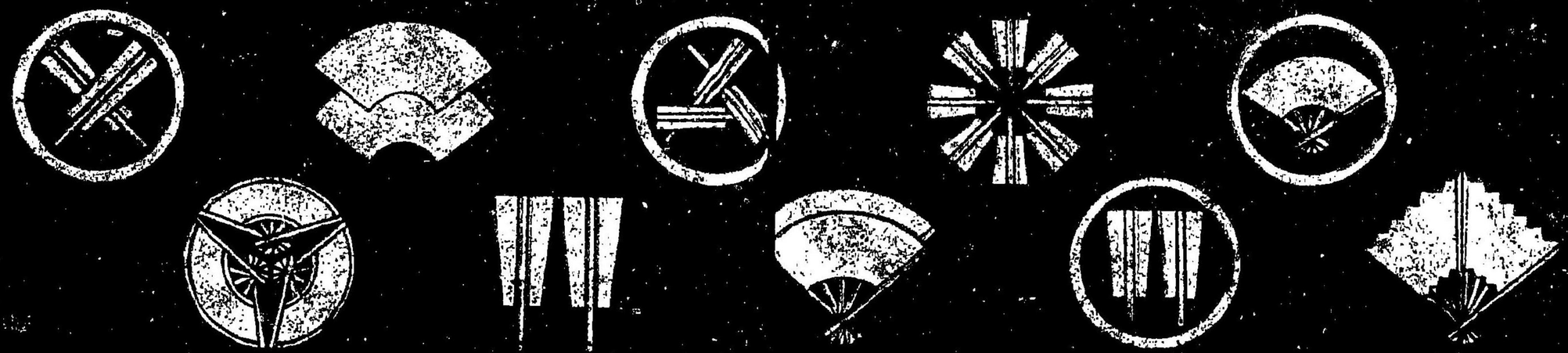

大高源吾

明治
44. 10. 4
内務

袖珍講談文庫發刊の趣旨

大戰捷後、我が大帝國の讀書界は、國運の發展と共に、亦た多大の發展を來たし、修養的の漢文學大ゐに勃興して、輕佻浮華の風漸く脫し、今や柔弱淫鄙の艶文學は驅逐せられて、人格の鍛錬德性の涵養に資する の讀物を、歡迎するの域に入れり、是れ實に大國民の讀書眼が崇高なる位置に達したるの現象にして、眞に國力發展の曙光と云はざる可からず。

現下の讀書界如上の現象を呈す、左れば其の餘波は娯樂的の讀物たる小說界にも、幾多の感化を及ぼし、英雄豪傑忠臣義士の範圍を脫したる作物は、之を手にせる人なきに至れり、是れ蓋し娯樂的に英雄豪傑忠臣義士の德性言行を知りて、以て自家の品位を高め、德性を涵養せんとするの精神が、期せずして一致せる者と云ふべし。

特71
253

弊堂此に感ずるところありて、今回袖珍講談文庫を發行せり、而して其の收むるところは、古今の英雄豪傑が國家に盡せる美談德行にあらざれば忠臣義士が主家に致したる至誠義擧ならざるはなし、是れ識ず知らずの間に、大國民の德性を涵養し、人格を崇高ならしむるの資料に供せんとするなり。

從來行はれる講談小說は、大形の册子に仕立て、華麗なる口繪を挿入し、一人の傳記を物するに、二册三册の續き物とせり、故に一人の傳記を知るに二三册の册子を要し、而して勢ひ高き價を拂はざる可からず、且つ其の携帶には殊に不便を感ず。

此に於てか弊堂は現代讀書界の要求に應じ、一人の事蹟を小册子中に遺憾なく納め、六號活字を以て、而も總振假名附に印刷し、製本も本綴とし、紙數を三百頁以上とし、而して僅々貳拾五錢均一を以て廣く講談讀書界に提供し、以て獻身的に現下の讀書界に忠實を盡さんとす。

各編納むるところの事蹟は、各著者が弊堂の微志を容れて、正確なる引書に依り、歷史を基本として、勤めて面白く準色せるものなれば、蓋し在來の講談物と其の內容に於て幾多の價値、特色を存するは素より、極めて低廉なる價を以て、完全せる册子を講讀さる、されば其の利益や其れ幾許ぞ、而も金文字入の本綴なれば、机上の裝飾ともなるべく、又た其の携帶にも至極便なれば、紳士淑女も喜んで之をポッケットに納め、以て旅行などの徒然を慰むる好伴ともなるべし。

如上の趣意に依り、本文庫を發刊したれば、滿天下の讀者諸君は、弊堂が出版業者の責任として、聊か盡したる微志の、存するところを諒とし、第一編より遂次愛讀歡迎の榮を垂れられんことを切望す。

二書房主謹白

序辭

浅野家の家臣大石内蔵助良雄を筆頭に、四十有六人の義士が、心を一にして主君の仇敵たる、吉良上野介義英の首級を得て、亡君が冥途の無念を晴したるは、天下悉く之を快擧とし、義事として、賞賛せざる者はない。

而して四十七士が其の生命を犧牲として、此の快擧に出でたる原因は内匠頭が上野介を双傷し、因て以て死を賜ふに起るも、其の双傷を餘儀なくせしめたる原因は、上野介の收歛に在り、上野介の收歛を殆ど公然の秘密の如くなさしめたるは、蓋し當時の風俗が然

らしめたるに依る。

當時の風俗は如何に、太平の夢に醉ふて、文弱に流れ、華美驕奢を此れ事として、士分の何んたる知らず、所謂る武士の道義地に墮ち、編笠の下に落英を賞し、打裂羽織の優姿を月影に映しては、我が身を繕らふと云ふ有樣であつた、其れ故に賄賂は幕府の要路に盛んに行はれてゐたのである、此の時に正義剛直の内匠頭は、此の賄賂を行なふことを知らず、故に其の至誠剛直が、哀れ我が身の仇とは爲つたのである。

斯る折柄に四十七士の精忠義烈が一體と爲つて、復讐の快擧に出でたるは、實にや晴天の霹靂とも云ふべく、武士の情眠醜行を覺醒せしめ

たる清涼劑と云ふべし。

此の四十七士の精忠義烈は、等しく我國特有の武士道の精華として遺憾なく發輝せしめたる千古の龜鑑である。

本編に於て、四十七士中の一人なる大高源吾子葉の略傳を述べた、蓋し源吾は四十七士中の大風流家にして、殆んど俳句和歌を友として暮せし純乎たる文人の感あり、然れども其の勇烈大剛に至つては、古英雄も遙に及ばざるの觀あり、歌を咏み句を捻つて、風月を友とし、無心に世を送る者とは、其の心膽、固より共に比すべくもあらず。

吁、目を瞋らし臂を張る者果して勇士か、能く咏じ能く吟ずる者果して文士か、或人源吾を評して曰く、其の凜乎たる英風は彼の槊を横

えて而して詩を賦する者かと、眞に評し得て盡せりと云ふべし、然らば亦た大高源吾が一生の言動は、採つて以て修養の一助と爲すに足る者ありと信ず、請ふ愛讀を賜へ。

明治四十四年仲秋

著者識

大高源吾目次

○大石邸の小酌……一
○内藏助源吾の短氣を抑へんとす……九
○赤垣源藏大高源吾を說く……一三
○源吾風流に堪能す……一三
○源吾邸の會合……一八
○二忠怒を呑んで歸る……二三
○雨中の大石邸内……二六
○老壯義士の心膽論……二七
○雨歇で意志投合す……二八
○源吾赤穗を去る……二九

○源吾の都住居……一六
○重阿彌寮の秘密會議……一三
○内藏助太夫を伴れて源吾の許を訪ふ……一三
○青葉茂れる東山の豪遊……一三
○時ならぬ花吹雪……一五
○烈士喜劍の大義……一六
○近松勘六山科に來る……一七
○武林唯七の强談議……一八
○堀部安兵衛の來訪……一九
○忠孝完美の名文章……二〇
○源吾間諜として弟子入す……二一
○源吾其の目的を達す……二二

○討入の日彌々確定す……二四
○兩國橋上の對面……二六
○武士の精神は明るまゐ……二六
○蕎麥屋に於ける源吾の一句……二七
○本多邸内の小酌……二八
○忠烈なる源吾の最後……二九

目次（終）

大高源吾

石竹園著

○大石邸の小酌

大高源吾

浅野内匠頭長矩殿の菩提寺なる、華岳寺の方丈と、赤穂の城代家老大石内蔵助良雄とは、無二の風流友達であつた、其れで今日しも、方丈が訊れて來て、内蔵助と二三局碁を圍み、未の刻半頃に方丈は歸つて行く、内蔵助は玄關まで送り出て、其のまゝ我が書齋へ引き返し、綻びかゝつてゐた庭の糸櫻を、餘念なく眺めてゐたが、何にやら俄かに氣のついたやうな有樣にて

ポン……ポン……と靜かに二つ三つ手を叩く

すると間もなく次の間の閾の外に兩手を突きて、御前樣お召しあそばされて

〻御座りまするかと、優しゆふ云ふたは、お花と呼ぶ内藏助の奥方お町の方の召使の小間使であつた。

『オヽお花か、市助は居るかな……ハイ……サム……其れでは一寸と、庭先へ呼んで呉りやれぬか……

『心得まして御座りますると、お花が立ち去ると間もなく、糸櫻の片脇より忠僕市助は、姿を現はして、靜々と椽先へ歩み寄り、苔の蒸たる數石の邊へ跪坐く、内藏助輕く打ち眺めて。

『アノ小野寺十内どのゝ許へ參つて、少しく御意得たきことの御座れば、御大儀ながらお越し願はれませぬか、御都合を承つて來て呉りやれぬか……畏まりまして御座りますると、忠僕市助は、小野寺十内の許へ、主人の仰せを傳えべく爲めに駈け出した。

其の後にてお花を呼び、殊に依つたら小野寺殿お越しであらふほどに、お越し

なされたら酒一ト口差し上げたい、左れば其の仕度、心を用ひていたし置いて呉りやれと、内藏助は折からの庭の春景色を下物に、十内を呼びて一酌催ふさんとの考えであつたとみえる。

申の刻半頃に小野寺十内は、内藏助の許へ來た、此の小野寺十内と云ふ人は内匠頭の家中で、一二を爭そふ大學者である、又た和歌俳諧にも堪能してゐる、左れば内藏助は常々より、我が肱股の相談相手の一人として、重きを置ひてゐたのであつた。

『此れは小野寺姓、御休息の折から無理に御足勞な煩はし、恐縮に存じ申す、内藏助は我が書斎に招じて叮嚀に挨拶をする。

『其の御尠酌は痛み入り申す、身許今日は朝まだきより、樂々といたし居り無聊に苦しみ居りましたる折から、却つて幸福に存じ、喜んで罷り出まして御座りましたと、叮嚀なる十内の挨拶に、内藏助は。

『其の御挨拶過分に存じ申す、實は打ち寛ぎて少しく、お物語りいたしたき儀の御座りまするので、先づ先づ御緩りと打ち寛ぎのほど、願ばしゆふ存じ申すと、云ふてゐるところへ、お花は煎茶を運ぶ。

小野寺十内は山吹色をなせる、其の煎茶を一口喫んで、而して庭の春景色を餘念なふ眺めてゐたが。

『御家老、御愛蔵の糸櫻が、モウソロソロと綻び初て御座りまするな、此處で雨がザッと一度參りましたらば、一度に笑ふことで御座りませうな。

『左樣、モウ三四日經てば笑ふで御座らふ、年々歳々花相似たり、歳々年年人相同じからずとか、古人は巧いことを申したもので御座る、アハヽヽヽ

お花は次の間へ現はれて、御前樣此れへお運び申し、宜しゆふ御座りませうか……ヤヽ……モウ仕度が出來たか、然らば疾く持てと、内藏助は云ふて打ち點きながら。

『實はお身の甥御、忠雄どの、儀に就きまして、少しく御相談いたしたくと存ずるので御座ると云ふ、忠雄と云ふは本編の主人公たる、大高源吾忠雄のことである、源吾は博學の名高き十内の甥に當る。

此の言葉に、十内は異な感を起したが左あらぬ體にて、源吾の儀に就いてお物語とな、はて……と十内は源吾の性質が短氣で、兎角に事を爲すに荒つぽいのを知つて居るから、若氣の無分別より、何にか間違にても仕出來したかと斯ふ思ひてか、其れを聞かふとしかゝつた時に、お花は酒肴を運び出した、内藏助は笑ひながら。

『小野寺姓、源吾どのをかこづけに、庭の春景色を下物として、一盃傾むけやうと存じ申すので御座る、左れば十分に打ち寛ぎて、御緩りとお盃をお取り下され、その代りに俄かの献立、馳走と申して御座りませれど……

『此れは強ういお厚志、痛み入つて御座る、酒は身許大の好物、然らば遠慮な

く頂戴いたしませうわいと、十内は盃を持つ、お花は給仕をする、ソヨ吹く優しき春の風は、糸櫻の枝を搖かせてゐる。

『御家老、源吾が何にか御不都合なる事にても、いたし申したので御座るかと十内は氣にかゝるとみえて訊れ始めた。

『イヤ、左樣では決して御座らぬが、身許源吾どの〻身上を氣遣ひて、此のほどよりお身に御相談申そう……申そうと存じて居つたので御座つたところが今日華岳寺の方丈がお遊びに見えて、世間話の折から、源吾どの〻お噂が圖らず出で申した、其れで急に思ひ出し、丁度櫻も綻びかゝつて居り申すに依り、久し振にて一酌傾けながら、お物語りいたそふと、斯樣に存じて突然ながら御足勞を煩らはし申したる儀に御座りまする。

『オヽ……左樣で御座りましたかと、十内は我が前に在つた朱塗の木盃を杯洗にて清め、御家老先づお一つと云ふて侑める。

『別儀にても御座られど、源吾どのは家中にても殊に御精神の堅固にして、日夜主君に御忠節を勵み下さるゝ、天晴の御家來、取り分け大島流の槍術の名人である、左れば主君のお覺えも格段に芽出度、内藏助も強う喜んで居りまする……イヤ、追從では御座らぬ、誠心誠意、なれど小野寺姓、一つの欠點が源吾どのに御座りまするじやて、アハヽヽヽ……と内藏助は、今小野寺より酌れたる盃を返す。

『其の欠點と申すは、短氣で御座る、短氣なればこそ、自然と物事が荒くなり又た片意地にも爲り申す、此の短氣を直して何うか直したいものじやと、身許斯樣に存ずるので御座る、お物語りと云ふは此の一條、別に事々しく申すほどの事にても御座らぬが……

『イヤ拙者も源吾の短氣には、常々より困り居るので御座る、短氣は損氣と下世話にても申せばと云ふて、時より懇々と意見をいたすので御座るが、性質と

ば申しながら、改めて奚れませぬには、困つて居りますので。

『サア其處で御座る、其處が身許とお身との相談で、御座るじや、他の事なら兎も角も、天性は云ひ聞かせた位ぬのことでは、決して直るものでは御座らぬ其れで互ひに智惠を絞り合ふてみたれば、又た良き分別がつかふも知れずと、斯樣に思ばれ申したので、アハヽヽヽ……

甥の身上を思ふての内藏助が優しき志に十内は太く打ち悅びつゝ、恐れ入つたる御家老の御厚志、有がとふ存じ申すと、喜びながら好める酒を六七杯傾むけたので、目の縁をホムノリと櫻色にした。

『左樣で御座りまするな、源吾の短氣を壓ゆる工夫と申しては……御家老、中々に是りや困難しゆふ御座りまするぞと、傾むくる十内の顏を眺めつゝ、拙者の考へ申すにはと云つて、オヽお花……銚子が輕ひではないか、氣のきかぬ代りを持てアハヽヽヽ……

○内藏助源吾の短氣を抑へんとす

大石内藏助良雄は、實に生れながらにして、君子の智德を具えてゐた人である、左れば家中の若武士の氣風に心を止め、其の氣風のよろしからざるところは之れを教え諭して、天晴なる人物と爲し、而して主君に忠節を勵ますやうにした、其れ故に赤穗の家中の若武士に、愚鈍なる者は更になく、又た忠節を勵まぬ者も一人もなかつたのであつた、其は主家斷絶に際し、復讐の快擧に加はつて、萬世不朽の名譽を惹にしたる、四十七士の中に其の半數以上が、壯年者であつたと云ふに照しても明らかである。

其れ故に今大高源吾忠雄が性來短氣にて、物事が得て粗忽に流るゝを惜み、如何かして心を優長に持たせたい者であると考へて、今しも源吾の叔父に當れる、小野寺十内を招き、其の工夫に就て相談を始めたのであつた。

内藏助は源吾の心膽は、忠と義との塊であつて、而して其の行狀は廉直であると云ふことを、能く見拔てゐる、左れば源吾はお家の爲めに、一際の助となる人物じやから、今の中に其の短氣を直す工夫を、廻らさればならぬと、一はお家の爲を思ひ、一つは源吾の身上を思ひて、斯は心を碎くのである。

小野寺十内は内藏助の何にやらむ、名案の出でたらしい容子を見て取つてか、ニコ〳〵とホヽ笑みながら。

『御家老……何にか面白ひ、お考へ、浮び申して御座りまするか、拙者には差し當つて、斯ふと云ふ工夫もつき申しませぬがと云ふ。

『内藏助は今お花が、持つて出て來た代りの酒を酌させながら、庭の方を眺めて、頻りと思案をしてゐたが、軈てウムと輕く點ひて。

『名案と云ふては未だ浮び申さぬが、併し一寸と考へのついたことが御座るじや、先づ一應お聞き下されと云つて其の盃を十内に酌す。

『拙者の考へでは、風流の道に心を傾けさするやうにいたしたら、如何で御座るかなと思はれ申すので御座るじやがな……

『其れでは御家老には、源吾に歌俳諧を學ばせたら、短氣が軟らぐであらふと思召されまするので御座りまするか……成るほどゝ、十内兩手を膝に置き、小首を傾むけつゝ、暫時思案に暮れてゐたが。

『如何にも風流の道は、自然と心を軟らぎて、精神が優長になるものに御座りまする、恐れ入つたる御名案……御家老なられば、斯樣なお考への浮ぶべきでは御座りませぬ、實に感じ入り申した、なれど御家老と十内の言葉が、稍や重るのに、内藏助は不審を抱きながら。

『俳諧のこと、お身は面白ふないと思召さるゝかな……

『イヤ決して左樣では御座りませぬが、併し源吾に俳諧は、些と柄にさすぎはいたすまゐかと、不圖思はれましたので……

『アハヽヽ……素より、源吾どの〻如き、武骨一點の短氣な賞には、似合しからぬ事柄で御座るじや、なれども彼の武骨を欺げ、彼の短氣を鎮むる良藥は俳諧より外にはあるまぬかと、身許は思はれるので御座る、源吾どのが十九や二十歳と云ふではなし、本年は確か二十四、なればモウ成ほど〻短氣の損氣なることを、會得さる〻に相違なきゆえ、必らず風流に心を傾むけらる〻やうに、爲るで御座らふと思はれ申ずじや。

『成るほど左樣仰せられてみまするとと、如何にも左樣じ御座りまするな、左樣なれば一つ風流に心を傾けよと、勸めてみまするで御座りませうかなと、十内の心は動き初めたのであつた。

『幾時にても能き機を見て、お身より風流に心を傾けよと、お勸めなされてば下さりませぬか……其れから、其んなら一つ行つてみやうと云はれたら、身許が添削をいたすで御座らふ、身許は性得の無風流、とてもお身の傍へも寄

られ申さぬなれど、源吾どの〻上達を早めやうとするには、お身より拙者が添削た方がよろしい、お身では何うも叔父甥の間柄ゆゑ、得て遠慮もなく勵もつき申さぬ、其れ故に拙者が稽古がてらに、添削て試るで御座らふ、アハヽヽ……

『イヤ恐れ入つたる御諚で御座りまする、御添削下さりまするとと御座りますれば、本人の喜は勿論のこと十内も何れほどに喜ばしいか、存じられませぬ左樣なれば御迷惑至極の儀では御座りますれど、宜ゆふお力そへのほど願はしゆふ存じまする。

『及ばずながら一骨折つてみませうわい、アハヽヽ……と其れより内藏助と十内とは、互ひに文武の話を下物に、酌つ酬れつ飲んでゐた、其の中に日は暮れかゝる、城下で鳴す入相の鐘の音がゴーンーゴーンと響く。

『御家老……彼りやモウ入相の鐘では御座らぬかな、遠慮なしに強う頂戴つか

まつゝて、太く酔ひ申した、此にてお暇つかまつりまする。

『未だ宜しいでは御座らぬか、今日は十一日、彼れ御覽じろ、モウ月がアハヽヽ……マヽ御緩りとさなれひ、糸櫻に月がうつらふ春宵の景色、幾時見てもあかぬ眺に御座れば、先づ先づモウ少しく過されひと、内藏助は心切に云ふて引き止めんとする、二人とも酒は可なりに飲ける方だから。

『左樣で御座るか、其れでは折角の御言葉に甘へ申すやうなれども、然らば遠慮なしに、モウ少々頂戴いたすで御座りませうかなアハヽヽ……と小野寺十内、そのまゝ持ち上げかゝつた腰を下した。

『我と我が庭の自慢をいたし申すやうなれども、糸櫻にうつらふ月の眺めは實に又た格別に御座りまするぞえ、アハヽヽ……先づ一つと内藏助は盃を酌す、興に乘つて十内も飲む、内藏助も亦た飲む、此に二人して一升ほどの酒を傾けたから、陶然を通り越して、大分に酔たのであつたけれども、二人とも戴の如く石の如き嚴格なる御仁であるからして、幾等酒に酔ふたとて、勿論作法を崩すやうなことは決してない。

『如何にも明月、春宵一刻價千金とは、實に能く穿つた語で御座ると、今しも十一日の上弦の月が、糸櫻の梢を離れて、玲瓏たる妙なる姿を泉水にあびせかけてゐる、此の夜景に見惚ながら、斯ふ云ふた、時しも聞こゆる鍾の音は、正に初夜であるから、十内は驚きながら。

『御家老、彼りや初夜では御座りませぬかな……

『モウ初夜で御座るか、時の經つは早いもので御座りまするな。

『お言葉に甘へ、遠慮なしに太く頂戴いたし、強う酔ひ申して御座る、左樣なれば、此れにてお暇を戴きますると云ふ。

『未だ未だお引き止めないたしとふは御座れど、併し夜更けての酒は、お互ひに身體の毒、然らば此れにて納盃といたすで御座らふと、此に十内は内藏助の

厚き志を謝し、暇を告げて歸つて行く。

十内の住宅は城下離れの武者小路である、大石の邸よりは、十町ほどの路の里、今し追手門外の松並木の處まで、過ぜし酒の醉を夜風に拂はせながら、戻つて來ると、月は愈々冴え切つて、天地を照す明るさは、宛然白晝のごとく、松の小影が際立て目に入るも、殊に嬉しく、春宵一刻價千金の妙句は、實に人を欺むかぬと、十内は酒と景色に太く精神を嬉しがらせつゝ、興に乘りてか、扇子を拔いて手拍子を打ちつゝ。

『信濃なる淺間ケ岳に立つ煙り、遠近人の袖寒く、吹くや嵐の大井山、捨る身になき友の里、今ぞ浮世を離れ阪、墨の衣の確氷川、下す筏の板鼻や佐野の渡に着にけり。

『アハヽヽ……さても、快き心地じや、人生無上の快樂とは、斯樣な時の心地を云ふのであらふか、さても愉快、ハテ面白やなと、謠曲鉢の木を聲朗

かにうたひ初めたが。

『急ぎ候ほどに、これは早や上野の國、佐野の渡に着きて候、あまりに大雪にて候ほどに、此所に宿を借り、泊らばやと思ひ候ふ、如何に此の家の内へ案内申し候ふ。

と小野寺十内興にかられて、北條時賴の臺辭を謠ひつゞけたる時しも、幾時の間に何處より來たりしか、二間ほど、へだてたる後より。

『其れへ過ぎ行きたもふば、誰にて渡り候ふぞ……と此れも亦た酒の機嫌でか、其れとも此の春の月に、心の狂ひてか、謠曲の口調にて聲をかけたる一人の武家があつた。

『ハテ面白の御仁……誰人なるかと、十内ピタリと立ち止まつて、振り返りながら、月明に透して靜かに見やりつゝ。

『斯く申す某は小野寺の十内にて候ふ、問るゝ其許は誰にて渡り候ふや

名乗れ候へ、アハヽヽヽ……と興がりつゝ高笑ひ。

『小野寺姓にゐらせられましたか、鉢の木の節面白ふ承はり申し、ハテ御家中の何誰かと、存じ申して御座りました。

『オヽお身は赤垣姓で御座つたか、今時分何方へ行れ申したかと、問はれて赤垣源藏は、靜かに十内の傍へ歩み寄り。

『日暮より餘り美しさの夜景に心うかれ、何處を的も白鷺の、水に漂よふ有樣にて、此の松並木を先刻より、漫歩いて居りましたが、只では興薄しと、一寸と城下へ足を入れ、五合ばかり……アハヽヽヽ……腹の虫奴を得心させての戻りに御座りまする。

『オヽ左樣で御座つたか、此の月この夜景では、お身には酒が無ふては叶ひまするまゐ、アハヽヽヽ……シテ此れよりお歸りで御座るかな。

『ハイ城下の備前屋にて、初夜を聞き、餘り夜更は御奉公の手前、恐れ入る儀

と存じての戻りに御座りまする、シテ御老體には一入の御機嫌と失禮ながら見ゐ參らせ申しまするが、何處へお越しあそばされまして御座りましたかと、源藏は云ふ。

『ウム……申の刻半頃より、御家老の許へ參つて、御酒戴き、日暮にお暇いたす筈であつたが、庭の月景色を見て行けとの强てのお勸めであつたので、思はず知らず御酒を過してな、お身と同じく初夜の鐘に驚ひて、今此れまで戻つて參つたが、松並木の得も云はれざる夜景に心うかれて、知らず識ず鉢の木の一節アハヽヽヽ……酒と云ふ奴は、老人まで浮らせくさるて……なれど好い心持じや、此れが本當に人生無上の快樂と云ふので御座らふ。

『左樣で御座り申したか、然らばお供つかまつるで御座りませう……

其れでは源藏どの、御同道いたすで御座らふと、十内老人は先に立つて二足三足歩み出したが、張てゐ細き松の根に、つまづひて、ヨロ〳〵と蹌踉るのを

源藏が後より、小野寺姓お危のふ御座りまするぞと抱く。

『アハヽヽヽ……大分に醉つて居りまするな、此れはお手數千萬と、二人は其のまゝ何にやらむ、泌々と物語りしながら歸つて行く。

○赤垣源藏、大高源吾を說く

『兄さん赤垣源藏樣が、お越しで御座りまするが、此れへお通し申し上げても宜ゆふ御座りませうかと、今し源吾が書齋の前なる、履脫石の上で好める鉢植物の手入をしてゐるところへ、妹が來ての此の取次ぎに。

『ナニ赤垣どのが見へたと、オヽ左樣か、其れでは書齋へお通し申して吳れ而してな、アノ源藏どのはお身も知つての通り、御膳よりは御酒が好物じや、左ればお茶の代りに、有合せ物で御酒をな、俺も今日は一口飲ふと思ふてゐた折からじやに依つて、アハヽヽヽ……

『オホヽヽヽ……左樣なら、御酒の仕度をいたしませうわいと、妹は愛くるしき眼に、無量の愛嬌を漂えつゝ、兄の橫顏を、ジロリと見やりて、そのまゝ玄關の方へ立つて行く。

『大高姓、御休息の折からお妨をいたし、恐縮に存じ申すが、今日は拙者殊に閑散で、朝より强う無聊を感じ居りますじや、其れで貴所こそ御迷惑で御座るが、實は遊びに……アハヽヽヽ……

『拙者とても御同樣、徒然の餘り、今鉢植物に惡戲をいたし居つたところで御座るじや、左れば其樣な御斟酌なしに、拙者の伽をいたすと思召されて、夕方まで緩くりと、お遊びのほど願しゆふ存じ申す、アハヽヽヽ……源吾と源藏とは格別の交際仲であるから、源藏の尋れて來たのを、源吾は太く喜んだのであつた。

『其の樣に親切に仰せられては、却つて恐縮に存じられますると、其れより

二人は世間話に餘念なかつたところへ、妹は出て來て。

『兄さん仕度が出來て御座りますが、直に運びましても……オヽ左樣か待つてたのじや、早う……心得まして御座りますると、立ち去る源吾が妹の後姿を、見送つてゐた源藏、不審顏にて。

『お身仕度とは何んの御仕度で御座るか、餘計な詮儀立をいたすやうでは御座れどゝ、云ふ源藏の容子は、至極に眞面目なり。

『茶の代りに一と口、有合せ物にて……アハヽヽヽ……

『ナニ、拙者に下さるゝと、仰せられるので御座りまするか。

『お身の來られたを幸ひ、お身をだしに拙者が飲みとうて……

此れは恐縮……と云つてゐる中に妹が手製のお料理は、其れ〳〵運ばれて、ブーンーと名產伊丹の香氣は、源藏の鼻を突いて腹の虫奴がキユーキユーと鳴き出すのであつた。

『此れは恐れ入つて御座る、酒の香氣を利ゐては、飲まずにゐられぬ厄介な源藏、然らば遠慮なく頂戴いたすで御座りますること、此に二人は誰に遠慮も好めろ酒に、稍や暫し舌鼓を打ち含ふてゐた。

『時に源吾どの、お身にお勸め申したいことが御座るのじやが、一つお聽き入れは下さらぬかなと、容子あり氣な源藏の言葉に。

『此れは又た改たまりたるお言葉、如何樣なる儀で御座るか、仰せられて下されひと、源吾は云ひつゝニツコリと笑ふ。

『お身風流に些と心を寄せてみらるゝ、思召は御座らぬかなと、源藏は源吾に風流を勸める、此れは松並木より、伴に爲つて武者小路へ歸る其の道すがらに於て、十内老人より源吾の噂が出た、デ左樣云ふことで御座るなら、拙者が一つ源吾どのに、お勸め申してみるで御座る、老人より仰せられては、事が改たまり申すに依つてと云ふた、十内は源藏と源吾との交際中を、能く

知つてゐるから、成るほど其れも尤もと、斯ふ考へたので、然らば御面倒ながら、折を見てお身より、源吾へお勸めなされては吳りやれぬかと云ふたので、最と易きことで御座ると、源藏が引き受けた、其れで今日しも尋れて來たは、全く十内との約束が果さんず考へであつたのである、なれども源吾は委しい容子が素より知らない。

『ナニ風流に心を寄せよと、勸めらるゝのか、アハヽヽヽ……源藏どの何にを云やる、風流とは歌俳諧のことで、古池や蛙飛び込むとか云ふ一件で御座るのでせうがな。

『如何にも左樣、一つお身凝れては如何に、其れをお勸めいたそふと存じて、實は參つたので御座る、拙者もお身と同じく、無風流至極の方で御座るが、併し中々に興味ふかきものゝ由に御座ればと云ふて勸める。

『御親切は至極有難ふ御座れど、先づ止めませうわい、風流なぞは壯年の武士

の凝るものでは御座らぬ、風流など申すことは、拙者が叔父の十内老人、さては吉田忠左衛門殿、又たは原總右衛門殿などの老人連のいたすこと、如何に太平の夢濃やかなればとて、拙者やお身のごとき壯年の武士が、心を傾けて爲りませうや、歌を詠み俳句を作る暇が御座らば、武道に腕を研くが肝要、源藏どの強う老人くそふなられたな、アハヽヽヽ……此の位のことを云ふて刎れつけるであらふとは、源藏百も承知二百も合點してゐたから、アハヽヽヽ……イヤ御尤も……なれど源吾どのと、言葉に力を入れて源藏至極に眞面目と爲るのである。

『お身は何んと思召すか知られど、あながちに強いばかりが武士でない、武を振ばれば爲らぬ時には、飽くまでも武を振ふなれど、靜かなる時には飽までも優しくいたされば相成らぬ、此れが武士かと、源藏は存じ申す、さて其の優しい心を養ふれば、風流の道に入るのが一番かと、心得申すので御座るじ

や、其れ故にお身も些と行つてみられては如何に……

『成るほど風流は心氣を養ひ、精神を優かにいたすものとは、聞き及んで居れば、お身の云はるゝこと、道理で御座るなれど、身許に風流は具はつて居り申さぬ、殊に歌を詠み俳句を作るは、學問上の申さば遊藝……武士に遊藝は不用で御座る、武士は武藝を勵んで、忠と義との二道を堅く守り居れば、其れにて十分かと存じられ申ずに依り、折角のお勸めなれど、風流は柄に無きこと先づ止めませうわいと中々強情である。

『忠直堅忍なるお身の御精神として、風流を好ませられぬは、御尤も千萬併りながら古今の名將と呼ばれ、武將と唄はれたる人に、風流の心得なき者は一人も御座らぬ、文武の兩道を具へてこそ、天晴れの武士、彼の太田道灌が山吹の古歌も御座れば、源藏お身に風流のことを、切にお勸め申すと云ふ、其の容子が如何にも熱心であつて、無理からでも、風雅の道に心を傾むけさせやうとする、擧動のあるを、敏くも源吾は視て取つて、不審を抱き、是れまで盃を取り交したことは、數へ切れぬほどであるなれど終ぞ風流の風の字をも口から外へ出したことなき源藏が、今日に限つて風流……風流と云ふは、ハテ合點のゆかぬことゝ、大高源吾は考へたので。

『如何にも強いばかりが、武士でない、文武の兩道を具なへてこそ花あり實ある天晴れの武士で御座るな、豐太閤も細川幽齋や、紹巴などを友として、歌俳諧を擧げられたとか、左ればお身のお勸め、至極御尤もで御座るけれども拙者の如き武骨者には、大高源吾の心稍や動いたらしい容子に源藏はゞた此の分ならば引き込めるわいと、思ふ心を色にも見せず。

『入り難くして解し易きは、俳諧とか聞き及ぶ、何事も初めは面倒、併し一度その道へ入れば、云ふに云はれぬ興味を感ずるものとかや、左ればお身が風流に心を寄せてみやうとの、お氣に爲らるれば、立派な師匠が御座る、シテ其

の立派な師匠は、お身ならば教える、他の者ならば嫌じやと、斯樣に云はれる左れば此の際お身に取つては、此の上もなき幸福で御座るに依り、其れで源藏切にお勸め申すので御座るが、源吾どの一つ心を寄せてみられては如何にと言葉巧みに勸めるのである。

『ウーム……シテ拙者ならば、教えるが他の者ならば、謙だと云はるゝと云ふその立派な師匠とは、何處に居らるゝ何んと云ふ御仁に御座るか。

『お身が兎も角も、心を寄せてみやうと云ふお考えに御座らば、其の師匠の姓名申し上けやう、と申せば源藏、意地の悪いことを云ふと、或ひは思召されんも、併し其の師匠の姓名を云へば、お身の御氣質として、義理からでも行つてみれば爲らぬと云はるゝに相違ない、其れでは源藏餘計なことを云ふて、お身に迷惑をかくるやうな事に成り申せば……アハヽヽヽ……

ウムー……と源吾は源藏の顏を眺めて、思案に暮れてゐたが、稍あつて靜かに

打ち點きつゝ、ニッコと笑ふて。

『折角のお身がお勸め、如何にも武骨一點張にては、武士とは云へ申さぬ、左れば上達するせぬは、習らふた上のことゝし、一つ暇々に心を風流に傾むけてみるで御座らふと、源吾は心底より云ふ。

『其の御心底に御座らば、師匠の名お明し申すで御座らふが、御別人でもない城代家老大石内藏助良雄殿で御座りまする。

『何んと云はるゝ、御城代となと、大高源吾は手にしてゐた朱塗の盃を落さんばかりに驚ひたのであつた。

『如何にも御城代が、お身ならば、風流の道を敎えんとの御諚に御座るじや、左れば先づ暇々に心を籠めて御稽古あそばされひ。

源吾は其のまゝ、兩手を膝に置き、何にやらむ頻りと思案に暮れてゐたが、稍あつて靜かに打ち點づきながら。

『お身如何して御家老が、拙者ならば風流の道を教えるが、他の者ならば嫌だと云はるゝと、云ふことを御存じでかな、此れには察するところ、深き仔細のあることゝ存じられる、其の仔細お差支なくば聞かされぬか。

『其の御不審御尤も、此れには段々と深き仔細が御座るじや、お身が風流に心を寄せられむとの、御決心相つき申せし上からは、何にをお匿し申そう、實は斯々斯様な次第で御座ると、赤垣源藏は、一部始終の容子を委しゆふ物語り聞かせたのであつた、聞き終つて大高源吾は、無量の感慨に打たれたかのごとき體にて。

『然らば拙者が生れつきての、短氣又た粗忽をば、軟げ心を優長に有たせんとの、有がたき大石殿が思召より、斯ばお心を配らせらるゝので御座つたか、チエー……辱なや有がたしと、源吾は嬉し涙をハラ〳〵と落す

『デ御座れば、源吾どの心を籠て御城代の教えを受けられよ、是れ一にはお

身の爲め、二つにはお家の爲めで御座れば……

『イヤモウ恐れ入るのみ、御城代を始め叔父上の、厚きお志し、肝肺に徹して忘却つかまつらぬ、源藏どの御安心下されひ、大高源吾、見ぬ太田道灌の勇は御座られど、風流の道は、道灌より上を越す、精神にて天晴れなる風流者に爲つてみせませうわい、アハヽヽヽ……

と其れより二人は、日暮まで飲み通し、然らば源吾どの、拙者は明日十内どのに、お目に掛り、お身の御心底を委しゆふ申し述ぶるで御座らふ、お身の其の喜びよりは、十内どのゝお喜びの方が、何れ位ゐで御座らふやら、知れ申さぬと、源藏も亦た殊の外なる滿足にて、好きな物を振舞れたる禮と、我が云ふところを聽き入れ呉れたる禮とを述べて、喜び勇みつゝ歸つて行く、是れが抑も大高源吾忠雄の、俳諧に堪能せる原因とはなつたのである。

○源吾風流に堪能す

大高源吾様が、お越しで御座りますると、例の小間遣のお花が、内藏助へ取り次ぐ、が、左様か待つて居つた、此れへ通せと、源吾を我が書斎へ呼び入れる、而して出來たかなと云ふて訊れられる。

『ハイ漸く綴つてみまして御座りますが、さて中々に面倒なもので御座りまするなと、源吾は鶯の初音を聞ぬた時の、心持を俳句に詠んでみぬと、内藏助より二三日前に、題を出されたので、其れを今詠んで携て來たのであつた。

『如何様な、些少な事でも、初めの中は面倒なものじや、其の面倒を通り越すと、如何様ことでも思ふ様に、出來るものじやわい、何んな面白ひ句が出來たかと、源吾の差し出すのを、内藏助が受け取つて見ると。

鶯の初音をきく耳は別にして置く武士かな。

『アハヽヽヽ……此れでは、些と文字の數が多すぎる、なれど別にして置く武士かなとは、如何にも面白ひ、此の分なれば信度上達いたすに相違ない、この意味にて文字の數を、五七五の十七文字に揃はせにやうにするがよい、モツ一度考えて作り直して來やれと、内藏助は我が子に物を教ゆるやうに、俳諧の話を懇々として聞かされる。

大島流の槍の名人、槍を持たせては家中に、源吾に敵する者は一人もない、二間柄でも三間柄でも、自由自在に使ふ大高源吾なれど、俳句をやらせてみると、斯様もの、宛然子供のやうである。

『宜しゆふ御座いまする、左様なれば又た作り替えて伺ひますると、其の翌日源吾は又た行つて來て、御城代此れでは如何で御座りまするかと、差し出すのを受取つて讀んでみると。

初音きく耳は別なる武士かな

今度は以前のよりは、少しは優しだけれども、勿論物にはなつてゐない、併ながら此れでは、未だ句になつてゐぬと、頭こなしに刎ねつけると、初心の身の必定嫌氣が生じて來るに相違ないと、斯樣考へたからして。

『大分に能ふ出來たが、モウ一呼吸と云ふところじや、左ればモウ一度、考へて作り替えて來てみゐと、云はれる、左樣で御座りまするか、然らばと云ふて源吾は又二三日工夫を凝せて、持つて來たのを讀んでみると、

武士の鷲きいて立にけり

と詠んである、内藏助は武士の鷲きいて立ちにけり……と、二三度口の中にて讀み上げながら、ポンと小膝を打ちつゝ、出來した源吾どの、天晴れの秀逸イヤ恐れ入つた、感ずべし感ずべし、眞に名吟じやと、大く賞贊し、意たらずに勵まれよと云ひ聞かしたが、其れより源吾は見た物聞いた事を、其の都度

俳句に詠んでみると、思ふ通りに十七文字に綴れるので、さて俳諧と云ふことは、面白きもの、風流は樂しきものと、其の面白味を段々と覺つて來る、覺つて來ると、グン〳〵と秀逸が出來る、斯のごとくにして一年ほど過したが、早や一際の風流者と爲り、隨つて此れまでの短氣は、何處へやら、今は却つて人の短氣を諭したしなめるやうに爲つた。

其の翌年の秋、即ち源吾が二十六の歳に、江戸詰となられたは、此の上もなき幸福じや、左乞に來た時に、内藏助はお身江戸詰となられたは、此の上もなき幸福じや、左れば君側の御用の暇に、芭蕉門下の十哲中の一人を選びて、師匠と爲し、磨き得らるゝだけ、風流を磨かれよと、親切に云はれる、源吾は何處までも厚き内藏助の恩を謝して、江戸へ行き、而して芭蕉門下の十哲中の首位を占めてゐた彼の有名なる榎本其角を師匠として、俳諧の道を勵んだから、左てこそ赤穗藩士中第一の風流者と云はるゝ人となつたのであつた。

『何にごとぞ、花見る人の長刀』と云ふ鬼貫の句がある通り、元祿年間は我が國の上下國民が、文弱に醉ゐ切つた骨頂である、其れ故に江戸は取り分け、俳諧が盛んで、武士町人は申すに及ばず、女子供に至るまで、古池やとか、初雪やとか云ふてゐる、其の中へ俳諧の興味を、十分に覺つた源吾が飛び込んだのだから、所謂る鬼に金棒で、グン〳〵と發達して行く。

主君淺野内匠頭長矩殿は、源吾の才氣を愛して居られたが、この頃は又た俳諧に志ざして、秀逸の句ばかり詠むより、一入に目をかけられ、殊に彼が天性の忠直は、太く長矩殿の精神に泌み渡つてゐたものとみえて、金奉行と腰物方のお役をかれるやうに爲つた。

さて大高源吾は、斯の如くにして江戸に在ること五年、元祿十三年の秋に國元詰となつて、赤穗へ歸つたところが、其の翌十四年の三月に、殿中は松の廊下に於て、大騒動は演ぜられ、内匠頭殿には、吉良上野の不埒を怨み、千古

の無念を呑んで、田村右京太夫の第に於て、切腹される、其れより淺野家は斷絶する、家臣の面々は、四分五裂せれば爲らぬと云ふことに爲つた、此れ等の事柄は、今此に一々記さずとも、讀者は其々の出版物に依つて、御承知のことゝ存じ進んで本編の主人公たる、大高源吾忠雄の事蹟について述べます る。

○源吾邸の會合

大高源吾に、幸右衛門秀富と云ふ弟がある、此れは叔父の小野寺十内方へ養子に行きて、小野寺の姓を名乘つてゐる、其れから又た岡野金右衛門包秀と云ふ一人の甥があつた、弟も甥も、亦た源君と同樣誠忠無二の武夫であつた。

衆枯盛衰は天下の習とは云へ、餘りに甚だしき主家の變化に呆れ、二つには主君の御無念、如何ばかりにてありしかと思ひ、三つには上野介の不埒を

憤うりつゝ、大高源吾は唯だ一人、座敷に在つて、千萬無量の感慨に腸を絞つてゐたが、思へば思ふほど面白くない、氣が屈して仕方がないので、妹は居らぬか、妹と聲高く呼んだ。

ハイ兄上、何にか御用で御座りまするかと、妹も太く打ち萎れてゐる、何にや彼やらと考へれば、考ふるほど、氣が屈し心が強う陰氣に爲つて、何うも爲らぬ、其れでと云ふ譯ではなけれど、一銚子燗をいたして呉りやれぬかハイ……女の身でも思ひ出せば悔しゅふて……

『此れ此れ……餘計なことを申さずに、早く仕度をいたし呉れと、妹に燗をさせ、源吾は座敷より庭に向ひて、大胡座かきつゝ、獨酌でグビリーグビリと飲んでゐると、妹が其れへ出て來て。

『幸右衛門殿と、金右衛門樣とが、打ち伴れだつてお越しで御座りまするぞへと云ふ……ナニ弟と甥とが打ち伴れだつて參つたと、ホゝ左樣か、相手欲やの折

柄丁度幸ひじや、此れへ案内しや。

小野寺幸右衛門秀富と岡野金右衛門包秀の二人は、其れへ行つて來て見れば、源吾が獨酌で早や眼の縁を、ホムノリと櫻色にしてゐるのを見て。

『兄上お一人で、お酒宴で御座ろか、さても御陽氣なことゝ、幸右衛門は斯る大變な場合に、眞晝間より酒を飲んでゐるとは、さても陽氣過ぎた仕業と、思ひてや少しく、ムッとして云ふ、其の顏色を源吾は敏くも見て取つて。

『陽氣で飲む酒のやうに見ゆるかなアハヽヽ……酒の詮議だては先づ後々のことゝして、お身達兩人打ち揃はれてのお越は、叔父上より何事か仰せつかつて御座つたのか、先づ御來意のほど承はりたい。

『イヤ左樣では御座らぬ、御家の事を思へば思ふほど、無念に堪えかねまするので、心の鬱を晴さんと、金右衛門どのゝ許へ參りましたるところ、金右衛どのはお身の許へ行かうとて、御仕度の最中で御座つた、然らば身許もお供いた

そふと斯樣に存じて、斯は兩人打ち伴れだつて參つたので御座ると、弟の言葉に源吾はニタリと打ち笑ひつゝ。

『か、左樣でかな、然らば先づ打ち寛ぎられひ、身許も先刻より此れにて只一人、其から其れへと種々のことを考へて、其れが爲めに强う氣が屈し、心が太く陰氣に爲つたので、酒でも飲んで氣を晴し、精神を養ほふと斯樣に心得てな妹の手數を煩らはしたのじやつた、氣の屈する時には酒に限る、酒は一時の憂はらしじや、有合せ物なれども、一口飲れぬか、醉と勸むるにはあられど、柴の代り、先づ一杯過されひ、飲みつゝ話すことがあると、云つて源吾は盃を先づ金右衛門に酌す。

話すことゝは、如何樣ことをと、金右衛門は思ふたからして、其れでは頂戴いたそう、柴よりは酒の方が可い、金右衛門どの過されひ、拙者は御免蒙むつて打ち寛ぎ申す、アハヽヽ……と幸右衛門は胡座をかく。

金右衛門は點ひて源吾の酌した盃を干して、幸右衛門に酌し而して源吾どの御免下されひよと云つて、同じく胡座をかく。

『只今幸右衛門どの、云はれた通り、お身に少し伺ひたいことのあつて、仕度なし出掛やうといたして居つたところへ、幸右衛門どのが來られて、此れより兄の許へ參らふと存ずるが、其方差し當つての用事なくば、共々に行きやれぬかと、斯樣に云はれる……左樣で御座るか、實は拙者も大高どの、許へ參らふと、斯樣に存じ、其の仕度をいたし居る折柄で御座れば、丁度幸ひ、お供いたすで御座らふと、斯樣に申して參りましたので御座ると、金右衛門の言葉に、源吾は點きつゝ。

『左樣で御座つたか、其れは能ふ打ち伴れだつて來て呉りやれた、先づ先づ打ち寛ざて語られひと、源吾は今し飲んで下に置きたる盃を取り上げ、殘れる酒を流し込みて、其の盃を金右衛門に酌すと、幸右衛門は氣を利かせて波

々と注ぐのである、而して自分が、今し源吾より受けし盃を干して、源吾は返すのであつた。

『時に兄上、お身は一昨日の御會議の節に、殉死の御相談が御座つたが、その節お身は左右の御挨拶をいたされなんだに就ては、必らず深き所存のあつての事ならむと斯樣に心得て、實は今日篤と、お身の御所存を承はりたくと斯樣に存じて、推參いたしたので御座るじやと、弟の幸右衛門は云ふ、其の尾に就いて、甥の金右衛門は。

『源吾どの、お身の御所存承はり度と存じて居つたので御座れば、服藏なく仰せ聞かされて下されひと云ふ。

源吾は聞きつゝ、ニタリ……と、ホヽ笑みながら、二人の顏を眺めた、源吾の眼は大分に醉が廻つて來てゐたとみえて、ドンヨリとしてゐた、なれど未だ醉顏朦朧と云ふほどではないのである。

『すりやお身達二人は、源吾に一昨日大會議の御席上にて、吉田忠左衛門どのや、原惣右衛門どのゝ仰せられたる、殉死の御意見に、何等の御挨拶をもいたさざりしに依り、其の返答……イヤナニ拙者の考えを、聞かばやとて推參いたされしか……ウム……と、源吾は其のまゝ小首を傾けて、何にやら頻りと思案をしてゐたが、何んと考へてか、幸右衛門手數じやが、一杯注いで呉りやれぬかと、飲み殘せし酒を干して盃を差し出す、幸右衛門は兄の云ふがまゝに、波々と注ず、其れを一呼吸に飲み干して、アヽ……好い心持ちじや酒は百藥の長とは能く云ふた、甘露……甘露……金右衛門どの、お身は中々にゆける方じや、先づ飲まれひと、其の盃を酌して、而して源吾は其の間の意見と云ふを逃べやうともしない。

『源吾どのお身の御所存、早ふ聞かされひ、主家の大事に際して、我々は氣が氣で御座らぬに依つてと、金右衛門は急きたつる。

『アハヽヽ……其の樣に急きやるな、急つては事を仕損ずる、短氣は損氣じや、身許も六七年前までは、武骨の一點張で、此の上なしの短氣ものであつたじやなれど、大石どのゝお諭に依り、俳諧に志して以來、とんと短氣が失せてな……アハヽヽ……さて失せてみると、短氣の揩氣と云ふことを、十分に悟られてなアハヽヽ……左れば、其の樣に急きやるな、夏の初めの日は長し、庭の若葉を下物に打ち寛ぎて、先づ十分に飲まれひと、二人の氣を焦り心を碎くるに反して、源吾は酒に心の稍や亂れ初めけるにや、斯んな氣の長きことを云ふてゐる。

金右衛門も幸右衛門も共に、源吾よりは年が五つ七つ下だ、血氣盛りの盛年なれば、何うしても氣が荒ひ、殊には主家の大動亂に際してゐるのであるから尙更である、然るに兄の落着き拂つてゐるに、幸右衛門はムツとして。

『兄上……酒は酒として、お身の御所存、疾く聞かされぬか、其れ承はりと

ふて、我々は參つたじや、お身の所存聞ぬた上にて、我々は意見がある、所存聞かぬ中は、折角の酒も甘ふは飲めぬ、サア疾く疾くと急き立つる。

『ハテサテ强ぬ短氣じやのう、拙者只今のところでは定まつたる所存と云ふて おはさぬじや、なれど殉死は、マア御免を蒙むらうわひ。

『何んと云はるる……と金右衛門は氣相かえて、源吾の醉顏を倩と睨む、傍より幸右衛門も亦た。

『スリヤお身は、殉死すること嫌じやと云はるるのかと睨みつける……

『如何にも、追ひ腹切ることは眞平御免を蒙むる、幸右衛門も金右衛門どのも能ふ考へてみられひ、追腹切つて主君の迷途のお供いたして何にお役に立つお身達は殉死のこと、好ませらるるかは知られども、拙者は御免を蒙むる、追ひ腹を切れば生命がない、生命無ふては仕たいことも出來ず、思ふこともいたされず、アハヽヽ……

二人は互ひに、顔と顔とを見合せて、呆きれ返つたらしい容子であつたが、其れではお身は、永年間戴かれたる殿様の御鴻恩を、忘却されたな、過されし酒の加減で、分別がつかざりしとあらば免も角も、只今のお言葉が本性より出でしとあつては、兄上といへども、聞き棄てならぬと、幸右衛門は両眼に血を迸らせて云ふ。

『如何にも、浴せし主君の御鴻恩ば、忘却いたさぬ、又た追ひ腹御免蒙むるとの拙者の意見は、酒の上の興でもなく、足らず勝なる無分別でもなく、全く心底より出でたる、源吾が本心、アハヽヽ……

『其れが本心とあれば、愈々以て聞き棄てならぬ、左ればお身は取り分け厚くお受しみを受けられたる主君の、御鴻恩を忘却いたされたな、さても不忠、呆れ果たる御心底で御座るなと、金右衛門は泪ぐむ。

『金右衛門どの、一寸と待たれひ、不忠者との一言は、源吾強う迷惑を感ずる

他の方々より不忠者と云はれたのならば、源吾少しも氣に障えぬ、又た云ひ開きもいたさぬ、なれど幸右衛門は拙者が弟、又た金右衛門どのとは叔父甥の間柄じや、左るに不忠呼ばりされては、此りや聞き棄てに爲らぬと云ふたが併し腹を立てたらしい容子は少しも表はれてゐぬ。

『不忠で御座らぬか、我が君が千古の御無念を呑まれて、切腹あそばされた、其れゆへに我々共が、追腹いたして冥途のお伽を、つかまつらむと存するのじや、是れ臣たる者が君に盡すの道にして、忠道の本旨かと存ずる、然るにお身は殉死が嫌じやと云はれる、是れ忠道に反する儀、其れ故に不忠なりと、金右衛門どのが云はれたに、何に不思議……サヽ……言ひ分あらば、源吾どの承はらふわい……と詰め寄る。

『然らば、云ふて聞かせうが、其の前にお身達二人に聞くことがある、我が君の冥途のお供つかまつつて、我が君に何れほどの御利益がある、イヤサ何れ

ほどのお役に立つか、其の容子を語られひ、少しにても利益になる、役に立つと云ふことがあれば、源吾喜んで追ひ腹を切らふと云ふ。

『なんと……二人は互ひに顔と顔とを見合せる。

サアお役に立つと云ふ、其の仔細を聞かされひ、其の上にて源吾が所存、委しゆふ語らふわい、アハハハ……と宛然主家の大變を寸毫も念頭に置ざるかの如き體にて、前に在つたる一合入の、朱塗の大盃へ、波々と手酌で酒を注ぐ二人は愈々怒り出して。

『殉死いたすは武士道の本旨、忠道の極意である、然かるに役に立つ立ぬの詮議立て、いたされるは……ウム……分かつた、さては兄上お身は、生命が惜しいと見へ申すな、ハテ情けなき御心底に、御成りなされたなと、弟の小野寺幸右衛門秀富は云ふて、ハラハラと思はず落涙せしは、立腹の峠を通り越して、情なさの餘りに、肺腑より出でたる熱血と見ゆる、金右衛門深き感慨

に打たれてか、差し伏向て大き吐息をつくのみである。

なれども源吾は、極めて平氣で、今注いだ朱盃を取り上げて、グビリ……グビリ……と嘗めるやうに飲んでゐたが。

『幸右衛門お主は何にを泣きやる、追腹を召すが武士道の本旨だと云やつたが……ツーム……さては、お主は殉死いたすは武士道に適ふから、武家として主君に立つるお役は、此れに上越すものなしと云やるのか……若し左樣と云やるのならば、お主の考えは強う間違ふてゐる、兎も角も一杯飲んで篤と考えられよと、云へど二人は無言にて、兩眼に涙を漂へながら、怨めしそふに、源吾の顔を睨と眺めてゐるのであつた。

時しも此の頃の時候に、在り勝の村時雨が降つて來て、南の風さへ加はつたのでか、其の飛沫が椽端へかゝつて來た。

折からの此の村時雨なので、坐敷は強う沈んで、三人が互ひに無言の業であつ

た、ところへ靜かに入つて來たは、源吾の妹である。

『兄さん、アノ堀郡安兵衛樣と、赤垣源藏樣とが、打ち伴れ立つてお越しあそばされました、此れへお通し申しましても、宜ゆふ御座りませうか。

『ナニ……堀部姓に赤垣性が御座つたとな……ウムと云ひながら、源吾は打ち點ひてニッコと笑みつゝ。

『其れは丁度幸ひじや、幸右衛門も來てゐれば、金右衛門どのも來て居らるる、其れでは此處へ御案内申して呉りやれと云ふ。

無言でゐた二人は、何んと考えてが、堀部姓に赤垣姓が御座つたとは、丁度幸ひじやと、幸右衛門が一人語のやうに云へば、金右衛門も亦た左樣で御座ると、云はんばかりの體にて、座を讓るべく爲めに坐りかへる。

○二忠怒を呑んで歸る

堀部安兵衛に赤垣源藏の兩人は、間もなく此の座敷へ入つて來た、源吾は先づ閾際まで出迎えて挨拶をする、幸右衛門も金右衛門も叮嚀に挨拶をする、堀部赤垣の兩人も亦た叮嚀に會釋をして、此に主客五人は、作法亂さず車座に陣取つたが、殺風景なのは、其の中央に飲みかけたる杯盤の置かれてあるのである。

折から村時雨は一入強うなつて來た、併し風は投げたからして、雨は至極にかとなしい、降り出しましたなと、堀部安兵衛が庭を一寸と眺めて、最初に云ひ出でたる言葉である。

『時雨であらふかと思つてましたら、何うやら此の容子では、本降らしゆふ御座りますなと、大高源吾は云ふ、すると赤垣源藏が。

『幸右衛門殿と金右衛門どのと、お三人にて御酒宴の最中と見へ申すが、頓んだところへ參つて、お妨けいたして御座つたなと云ふ、而してアハヽヽ……

…と、源藏は相變らずの上機嫌にて高笑ひをする。

『イヤ酒宴と云ふ譯では御座らぬ、實は身許今朝目覺てより、何んとやら氣分優れず、其れで酒でも一口味ほふたらば、又た氣分の直ることでもかなと、斯樣に存じ申して、手酌の醉を買ひ居りましたる折から、金右衛門どのと幸右衛門とが參つたので、茶の代りに……アハヽヽヽ……と

『オヽ左樣で御座つたか……氣の鬱せる時は酒に限る、身許もお身と御同樣で今朝目覺てより何んとなく、氣分が惡ひ、其れで五合ほど流し込みて腹の虫奴を得心させた時に、安兵衛どのが御座つて、大高姓の許へ遊びに行かうでは御座らぬかとの、お誘ひ、其れ宜しからふと斯は兩名打ち伴れ立つて、お邪間に伺ふたので御座るじや、アハヽヽヽ……

『源吾どの主家の大事は大事、我々は近頃殊に閑散で、身體の置き場に困り申すじや、と云つて、暢氣らしく謠曲も唄はれず、又た物見遊山にも、世間

の外聞として行かれず、其れでと云へば、お身に對して失禮にあたるが、全く其れで、お身の許へ遊びに參つたので御座るじやと、云ひながら幸右衛門と金右衛門の顏とを眺と眺め、而して源吾の顏を輕く眺めて、アハヽヽヽ……

『オヽ左樣で御座つたか、御同前に近頃は身體が閑散……又た勤と云ふてあらぬ身は、誰に遠慮も何んの其の、ハテさて氣樂なもので御座るじや、折からの村雨は打ち寛ぐには、得も云はれざる興で御座る、されば夕方までなと、明日の朝までなと、お遊び下され、源吾好きお相手を得て、斯樣な喜ばしいことは御座らぬと云ふてゐるところへ、源吾が早くも其れと云ひつけたるものか其れとも亦た正覺坊の赤垣源藏が來たので、茶では納まらぬと氣轉を利かせしものか、妹は改めたる杯盤を運んで來て、亂れてゐた先の杯盤を取り退けるのであつた。

『源吾どの、御酒下さるるので御座るかと、安兵衛は杯盤を眺めて云ふ。

『下物と申しては御座られども、茶にては興も薄く、且つ又た最早や午の刻。其れゆへ　お茶の代りに、先づ一ト口アハヽヽヽ……

『折格の源吾どのか、思召し、遠慮は却つて失禮、早速　頂戴いたすで御座らふわいと、赤垣源藏、酒と見たらば、何ぞか見逃しのなるべき、早や朱塗の盃に手を掛けて、甘露甘露……と、些々たる事には頓着せぬ彼は、キユ！と一口に飲み干して、ヤレ甘ぬ、アハヽヽヽ……と舌鼓打ちつゝ、頬の周圍を右の手にて輕く撫でてゐるのである。

幸右衛門と金右衛門の兩人は、安兵衛の云ふこと、源藏の爲すこと、宛然狂人の言動に似て、主家の大變事を知らざるものゝ如く、言語道斷の擧動なるに内心太く呆れ返つて、無言のまゝでゐたが、源吾は二人の呆れ返つてゐると云ふことを知つてか、將た悟らひでか。

『御兩所、只今拙者幸右衛門と金右衛門どのとより、强ひ論鋒を差し向けられ申してな、少々閑口いたして居るところで御座つた、其れで一つ間違えば兩人に、鐵拳の御馳走を戴くところで御座つたが、幸ひ御兩所がお越しなされたので、鐵拳を免れ申した、アハヽヽヽ……

『左樣で御座つたか、シテ其の强ひ論鋒とは、如何樣なる儀でな御座つたか、お差支なくば承りたいもので御座ろなと、安兵衛は悠然と構へつ云ふ。

『別儀でも御座らぬが、一昨日會議の節に、吉田忠左衛門殿、原總右衛門殿その他五六の方々より、殉死のお話が御座つた、其の時に拙者が、左右の意見も述べず、聞き流しにいたして引き取つたに付き、改めて拙者の所存を叩かれたので御座つたと、源吾の言葉に。

『ホ！……成るほど、シテお身は其れに就きて、何にか意見を述べられたかなと、安兵衛は云ひ終つて一口飲む。

『追腹は御免を蒙むる、痛ひ思ひをして腹をかき切り、あたら玉の緒を斷ち切

つて見たところで、我が君のお爲め、お役に立つと云ふではなし、なれども追腹して冥途へ參り、我君のお役に立つことが御座つたら、其りや御鴻恩を辱なふせし、主君の御事で御座れば、隨分追腹つかまつらぬでもないが、何う云ふ役に立つか、先づ其の仔細を語られひと、申せしところ、兩人ばイヤハヤ強い立腹でな、殉死は武士道の本旨にして、忠道の極意じや、左るに追腹を拒むとは、見下げ果たる御心底……不忠の至りと、斯樣に云ふて責めたてられてゐたところへ、御兩所がお越し下されて、漸く鐵拳だけは免がれたと云ふ次第で御座るじや。

『左樣で御座つたか、シテ見ると、幸右衛門殿も金右衛門殿も、殉死に御贊成と相見へまするなと、云ひつゝ、堀部安兵衛は、兩人の顏を睨と眺めて、何にやら思案に暮れてゐたが、輕く打ち點ひて、ニタリと笑みつゝ。

『赤垣姓、お身は今源吾どのの云はれたこと、聞かれたであらふが、一昨日

の御會議の席にて、殉死の御相談ありたる時に、お身も確か源吾どのや、拙者と同樣、無言党の聞き流し組で御座つたのう。

『如何にも左樣、この際殉死などゝは愚の至り、拙者も源吾どのと同樣の考えにて、眞平御免の方で御座るに依り、左右の意見を、彼の席上にて述べずに聞き流して御座つた、只今お話の容子に依れば、幸右衛門どのも金右衛門どのも、殉死に御贊成の御容子で御座るやうだ、なれども悪いことは申さぬ、お止めなされ、源吾どのゝ云はるゝ通り、追腹召されたところが、御他界あらせられたる主君に對し奉つて、何んのお役にも立ち申さぬ、追腹は武士道の本旨だとか、忠道の極意だとか云はるゝは、昔のこと、左れば其の樣な堅つくるしきお話は、折からの村時雨に、サッと流して、甘露の味に舌鼓を打たれて、先づ終日打ち寛ぎられひ、アハヽヽヽ……安兵衛どの左樣では御座らぬかなと、源藏は他愛もないことを云ふ。

『如何にも左様じや、モウ〳〵其の様な野暮な話は、御両所ともに、お止めなされて、打ち寛ぎられひと、安兵衛も同じく仙愛もないことを云ふので、幸右衛門も金右衛門も愈々呆れ返つて了つて。

『然らば殉死云々の話を、堀部姓にも赤垣姓にも、野暮じやと仰せられるので御座りまするか、幸右衛門は眼を釣り上げて云ふ。

『如何にも左様・御酒の席には、ふさはしからぬお話しで御座るじやから、止められひ、假し追腹召されたところが、何んの役にも立ぬこと、所謂る犬死で御座るて……左るに依つて、モウ〳〵其の様なお話は止めにして、先づ一口飲まれひと、安兵衛は我が前に在りし盃を持つ。

『其れが宜しい、酒に限る、拙者がお酌仕るで御座りませうと、赤垣源蔵は傍に在つた銚子に手を掛ける、安兵衛はその盃に盃洗の水を潜らせて、幸右衛門どの、先づ一口召し上がられひと差し出すのを、ハテ汚らしい、其の

様な心底の人の盃と、そのまゝ打ち棄てやふかとは、氣を焦つたが、イヤ待て作法は作法と思ふたから、其の盃を受けた。

受けたことは受けたが、幸右衛門は其の盃を下に置きたるまゝにて、折格の御厚志、お盃は頂戴いたしたなれど、御酒は眞平御免下さりませ、殉死の話を野暮だとか、堅くるし過ぎるとか仰せらるゝお身様方には、主君の御無念、お家の大變事など、毛頭御念頭に掛らせられまぬ、左れば御酒も甘露の味がいたすで御座らふなれど、お家のことが心頭に掛る我々には、味が御座らぬ……イヤナニ陽氣浮氣のやうに、酒などを飲んでゐる場合では御座らぬに依つて、御辭退申す、ノウ金右衛門どの左様では御座らぬかなと、幸右衛門は聲を震はせて云ふ。

『左様で御座るとも、堀部姓にも赤垣姓にも、源吾どのと同様の御心底ならむかとは今まで存じ申さなんだ、左るに其の御心底承はつてみて、

呆れ申した、此の場の容子にては、大方夕方までも、明日の朝までも、飲みつゞけらるゝであらふ、左れば此の樣な席に長坐して、萬ゲ一にも心の亂るゝごとき事あらば、油々しき大事、モウ此れよりお暇いたそふでは御座らぬかな、金右衛門秀包は云ふ。

赤垣源藏は酌をしやうとて、銚子に手を掛けてゐたが、此の樣幕に呆れて其のまゝ兩手を膝に置き、何にやらむ深く感心してゐたのかの如き體である。

幸右衛門は、然らばお暇いたそう、其の方が可い、左樣なれば方々、只今金右衛門が云ひし通りの次第で御座れば、此れにて失禮いたし申すと云ふて、其のまゝ二人は打ち伴れだつて立ち上がる。

安兵衛も源藏も、又た源吾も、無言のまゝにて叮嚀に打ち點くのみ、而して腹立しく歸り行く、二人の後姿を、千萬無量の感慨に打れたるかの如き容子にて眺と見送つてゐる、雨は畑降となつて、若葉は新綠の露を滴はせつゝ、時々冷やりとせる風が吹いて來る。

○雨中の大石邸内

幸右衛門どのも金右衛門どのも、さて中々の御忠義、鐵石も啻ならぬ御心膽、徐ろに見ゐ參ちせ、心中轉た感涙に咽び居つて御座つたと、二人の歸り行く後姿を一心不亂に打ち眺めてゐた安兵衛は云ふて、打ち點く。

すると傍にゐて同じく、其の後姿を見送つてゐた赤垣源藏が、如何にもお若けれども見上げ申したる御兩所の御心底、恐れ入つて御座つた、流石は源吾どの、弟御に、甥御だけ御座つて、イヤハヤ感服いたして御座つた、彼の樣な堅固なるお志しならば、天晴れ亡君のお恨をと、云ひ來たつて、赤垣源藏は四方を見廻し、俄かに心付きたるかの如き體にて、聲を一段に低めつゝ、身體を少しく前へ差し出して。

『ノウ堀部姓、左様で御座らぬか、必らず亡君のお恨みをと云へば、安兵衛も亦た輕く打ち點きて。

『天晴れなる御心底、アノ御容子にては、必らず亡君の御恨みを晴すことの出來申すに相違は御座らぬ、サテも頼もしきことで御座ると、至極に滿足なる體にて云ふ。

『舍弟の心底も甥の心底も、彼の樣子にては、大丈夫のやうに推察いたされ申す。實は先刻兩人が打ち伴れ立つて參り申したに依り、一つ兩人の心腹を確かめてみやうと存じ申して、一昨日の御會議の席に於ける、殉死の事を申して其の節身許が一言半句のお答へだもいたさぬりしを訊れ申せしに依り、此れ幸ひと、殉死のことを非難いたし申したるに、彼の樣なる立腹の體にて立ち歸つて御座つたが、彼の容子に依れば、彼等は我々が所存打ち明しても、大丈夫かと存ぜられ、內心に大く打ち喜んで居り申したので實は御座りますじやと、

大高源吾も嬉しそふな容貌にて云ふ。

折から村時雨は地雨と變りて、烈しゆふ降つて來る、源藏は雨の容子を眺めながら、可い雨じや、我々が落ち合ふて密議をと、云ふてゐるところへ、源吾の妹は突如に銚子を持つて入つて來た。

『源藏どの、銚子の熱ひのが參つた、折からの雨は我々三人が落ち合ふて酒酌み交すには持つて來いで御座るじや、サア過されひと、源吾の言葉に妹は氣轉を利かせて。

源藏樣お酌をさせて戴きませうと、銚子を持つて靜かに源藏の傍へ寄る身許にて御座るか、其れは御心切恐れ入つて御座ろ、なれども餘り多分に頂戴いたして、强う醉ひ申しては、失禮で御座るほどに、アハヽヽヽ。

『何にを仰せられまするやら、貴方樣は御家中にて、一二を爭そふ御酒家、サアお過しあそばされて下さりませ、オホヽヽヽ……

『是ればいよ〳〵恐れ入つて御座る、左様なれば遠慮なしに、頂戴いたしませうかなと、源藏は我が前に在つた、壹合入の大盃を取り上げる、妹は其れへ波々と酌をするのである。

堀部姓へも、お酌いたさぬか、ハテ氣の利かぬアハヽヽ……と源吾の言葉に妹はパッと顏に紅葉を散せながら、安兵衛樣お酌をいたすで御座りませうと、又たも銚子に手を掛ける。

『オヽ左樣で御座るか、然らばお酌を願ふで御座らふかなと、盃に手を掛ける、妹は波々と酌ぎて銚子を兄の傍へ直して、其のまゝ下つて行く、源藏は其の酒を飲み干して、盃を源吾に酌しつゝ。

『時に大高姓、昨日安兵衛どのゝ宅にて、お話しいたせし一條、お身お考へ置き下されたかな、實は其の儀に付き、打ち寛ぎて御相談いたし度と存じて、斯は打ち伴れ立ちつゝ、お伺ひ致したので御座る、と云ふはお身の許な

らば憚かるところなく、十分に御相談いたさるべくかと存じてゞ御座るじや。

『オヽ左樣で御座つたか、實は身許夕方に、安兵衛どのゝ御許まで、矢張り其の儀にて御相談に罷り出やうかと、存じ居つたので御座る、折りからお身達が打ち揃はれて來られたので、定めて昨日の一條に就いてゞ御座らふと存じ居つたので御座つた、此の雨にては、何誰も遊びに來らるゝ方も御座るまゐ、左れば御内證の御相談には、持つて來ぬの日、然らば互ひに意見を述べ合ふで御座りませうわいと、云ひつゝ三人は互ひに進み寄りて、手焙の中に、金くの車座とは爲つたのであつた。

『昨日一寸とお互ひに、意見を述べ合ふたる通り、老人方の中には、殉死の御意見を吐かれた方々も御座つたれど、此の際追ひ腹仕つゝて亡君のお供いたしたればとて、何んのお役にも立ち申さぬ、其故に亡君のお恨み重なる吉良殿の御首級を戴くがよろしかるべくと、我等兩人は先づ確と決心の臍を

堅めたので御座るが、お身も昨日の御言葉御座りしことゆへ、御同感の儀と存ぜられ、篤と御相談いたそふと存ずるので御座るじやとは、堀部安兵衛が云ひ出でたる言葉であつた。

『オヽ左様で御座つたか、拙者も昨日お話しいたしたる通り、亡君のお恨をお晴し申し、其上にて腹切るが、是れ武士たるものゝ、此の際主君に報ひ奉る本懐かと存ぜられ申す、左れば誰が殉死せい、追腹つかまつれと申したれば、拙者は不腹で御座るじや、右に付き今し弟と甥とが参つて、殉死のこと申し出でたるを、朝りて故意に彼等を怒らせ、而して他愛もないことばかり申し居つたは、全く彼等両人の精神を試さん爲め、然るにお身等も此れへ御座られて、容子を御覧ぜられたる通り、途方もなき立腹、不忠呼はりいたして立ち帰つて御座つた、其れゆへにヤレ〳〵賴母敷人物、アノ心底ならば、拙者等の意見を其れとなく、漏せても差支は餘もあるまじと、斯様に存じて

居つたので御座つたと、源吾の返答。

『オヽ左様じ御座つたか、如何にも如何にも、其れではお身は昨日御相談申し上げたる事は、飽までも御賛成にて、亡君のお恨をお晴し申した其の上にて、切腹いたすと云ふ御決心に御座りまするなと、源藏は念を押す。

『素よりのこと、就ては御両所にも右の御決心で御座れば、此に三人は同心異體で御座るに依り、折を見て我々の心底を、金右衛門にも又た幸右衛門にも物語りいたしても、宜ゆふ御座りませうなと、源吾は重れて云ふ。

『愈々其れと定まらば、お打ち明け下されて、我れ〳〵の仲間へお引き入れ下され、金右衛門どの〳〵御容子と云ひ、幸右衛門どの〳〵御容子と云ひ、盡とく感心いたして御座つたと、堀部安兵衛は云ふて、更に言葉を改ため。

『然らば最早や彼れ是れと、繰り返して申すには及ばず、御身の御決心其の通りに御座れば、我々は亡君のお恨をお晴せ申したその上にて、切腹と云ふ、

此れに動かぬ精神と定め置くで御座らふ。

『素よりのこと、如何なる方が如何なる事を、今後申し出でられやうとも他に心を動かさぬと云ふ決心に、いたし置くで御座ると、源吾は云ふ。

『斯樣に各自の決心が定まらば、折から丁度幸の此の酒盛、改めて互の決心動かぬ爲めの、誓の血盃を酌み交そふでは御座りませぬかと、赤垣源藏は滿面に得も云はれざる喜色を漂へつゝ斯は云ふ。

『成るほど其れが宜しゆふ御座らふ、心の變らぬ……イヤナニ、身體は三つに分るれど、心は一つと云ふ印を視ふ血酒盛……如何にも此れは妙で御座る然らば早速すゝり合ふで御座らふと、源吾は云ひつゝ、容を正して居住居を直すのであつた。

『如何さま血盃とは是りや妙で御座るじや、然らば互ひに、すゝり合ふで御座らふわいと、源藏が今し干して、源吾に酌したる其の豐合入りの朱塗の大盃

を取つて、我が前へ置き、左の腕を其の上へ突き出して、刀の小柄を脱き上膊の中ほどを下緒にて堅く縛り、而して小柄でプツリと輕く突いた、鮮血は迸り出て盃の中へポトヽと、十滴ほど滴る、すると今度は赤垣源藏が其の通りにして、十滴ほど滴らせる、最後に大高源吾が、亦た其の通りにする、此れにて三人の血漿は各十滴ほどづゝ、其の盃の中へ入つた、其の中へ赤垣源藏が銚子の酒を波々と酌した、而して箸にて靜かに掻き交ぜると、酒は紅に變じた、其れを三人にて飲み分けた。

『サア此れで可い、アヽ快い心持じやと、安兵衛は兩手にて胸を撫で下しつゝ云ふて、アハヽヽヽ……と高笑ひをする。

『此れにて心持が强う快く爲り申した、斯く誓が相立ち申したらば、堀部姓先刻お身と御相談申せし通り、大石殿の御邸まで、お伺ひいたそふでは御座りませぬかな、源藏の言葉に安兵衛は點きつゝ。

『大高姓、實は先刻赤垣姓と御相談申したには、お身の御心底確實に相定まり申したらば、三人打ち伴れ立つて、大石姓の許へ參り、我々が心底打ち明けて、亡君の御無念を晴さむ一條を申し出で、内藏助殿に御贊成を願ひ其の上にて改めて、一同へ御協議を願ふかと、斯樣に存ずるので御座るが、此の儀はお身何んとお考へで御座るかなと云へば、源吾はポンと小膝を叩きつゝ、如何にも此れは妙案で御座るわい、左樣なれば三人打ち伴れだつて、大石殿の御許へ、お伺ひ申し上げるで御座らう。

『其れでは此れより直に、お伺ひいたすで御座らふと源藏は促す。

『然らばお供いたすで御座りませうかと、此に源吾は羽織袴に作法を正し、三人が打ち伴れ立つて、雨中を厭はず、靜々と大石内藏助の許へ行く。

○老壯義士の心膽論

大石の邸は表門が、ピタリと閉め切つてあつて、通行を許さない、此れは内藏助が將軍家へ對して、陪臣の身の盡すべき作法を、衷心より表してゐるのであろ、其れは江戸の邸を殘らず取り上げられる、又た赤穗の城を、明け渡せと云ふ命令があると同時に、其の城を明け渡すべき、仕度をせいと云ふ命令が、又た達してゐる、而してモウ十四五日の後には、城を請取るべき上使が來られる、左れば淺野家の家臣は、殘らず浪人の身上である、其故に内藏助は從前の通り、表門を麗々敷明けて置くは、禮にあらず、蟄居謹愼の意を表せればならずとあつて、さてこそ表門を閉め切つてゐる。

此れを見て、三人は無限の感慨に打たれながら、裏門の方へ廻ると、裏門も亦た閉め切つてあつて、潜戸が開ひてゐて、其處より出入をするのである。御家老の何處までも、士分の作法を守らせ給ふには、さても恐れ入つて御座るなと、源藏の言葉に、如何にも左樣で御座る、裏門の潜り戸より通行をさせら

れると云ふには、御注意のほど實に恐れ入つて御座ると、源吾も安兵衛も云ひつゝ、潜戸より入つて行くと、多年内藏助に仕えてゐる、忠僕の市助が、内玄關の前の泥を頻りと掃事してゐる。

市助は三人の姿を見るより、オヽ堀部様に大高様、赤垣様打ち揃はれて能ふこそのお越しで御座りますなと、叮嚀に會釋をする。

三人も亦た叮嚀に會釋をして、而して内藏助殿には、御在宿で御座るかなと先に立つたる堀部安兵衛が訊ねる。

『ハイゐらせられまする、先刻より吉田忠左衛門様に、小野寺十内様、原惣右衛門様お三方打ち伴れだつて、お越しあそばされ、何にやらむ頻りと御相談いたして居られまするとと云ふ。

『オヽ其れでは、お三方が打ち揃はれて見えて居らるゝかと、堀部安兵衛は機悪しとは思ふてか、一寸と小首を傾むけたが、直に。

『如何がいたしたもので御座らふな、お三方がお越しとあつてみれば、御遠慮申して、又た出直すが可からふで御座るかなと云ふ。

左様で御座りまするなと、二人は顔を見合せて、黒案に暮れてゐたが、お三方がお越しとあつてみれば、思ふに込み入りたる、お話しのおありあそばすに相違御座るまゐに依つて、お妨げいたすは却つて恐れあり、然らば又た明日にても、出直す事にいたすで御座らふかなと、源藏が云へば、源吾も其れが宜ゆふ御座らふと云ふので、安兵衛は。

『左様なれば、引き返すで御座らふと云ふを、市助は傍より、折角この大降にお三方打ち揃はれてお越しあそばしたので御座りまするれば、兎も角も此の由、御前様へ申し上げるで御座りませうほどに、暫らく此れにて、お待ちあそばされてゝ下さりませと云ふ。

『成るほど其れも左様、然らば市助どの、一つ此の由を取次で呉りやれぬか、

と安兵衛の言葉に、心得まして御座りますると、市助は其のまゝ奥へ行つたが間もなく其れへ出て來て。

『堀部さま、お三方打ち揃はれてお越しの由、御前樣へ申し入れましたるところ、少しもお差支えは御座らぬに依つて、此れへお通し申して呉りやれと、斯樣に仰せられてゞ御座りましたゆえ、何とぞお通りあそばされて下さりませと云ふ。

『ホヽ左樣で御座つたか、然らば御免蒙むつて、お邪魔いたすで御座らふわいと、此に三人は市助の案内にて、奥まりたる例の座敷へ通る、床の正面には内藏助が控えてゐる、其の左右に吉田忠左衛門、小野寺十内、原惣右衛門の老人連三人が、ズラリと居並んでゐる、而して雨なので、一入氣が鬱してならぬのか、名庵備前の保命酒が、錦手の臺附盃に盛られて、各手の前に一つ宛置かれてある、三人は下座へ坐りて、一同へ叮嚀に會釋をする、一同も亦た叮

嚀に會釋をされる。

『雨中御一同打ち伴れられてのお訪れ、大儀に存じ申す、お互ひに兎も角も閑散の身の上へ、先づ御緩りと打ち寛ぎられひと、内藏助は云ふ。

『恐れ入りまして御座りまする、ツイ荷且の村時雨かと存じ居りましたに、到頭地雨と變じ、一入の難渋に敷に存じられますると、安兵衛の言葉、内藏助は打ち點く。

『我々三名が突然、斯く打ち揃ふて御邪魔に推參仕りましたは、少しく御家老のお耳にまで、申し入れ度き儀の御座りましてゞ御座りますると、源吾が云ひ出る傍より、源藏は。

『併し御家老、只今大高姓が申されし其の話と申すは、我々が勝手の意見に御座りまするに依り、何にも今日申し上げれば、爲らぬ儀じは御座りませぬ以て、市助どのにまで、先輩の御方々がお越しで御座りますれば、依手

勝手なることに、お坐興のお妨げいたすは恐縮の至りと、斯様に存じ申して又た出直して參るよし、申し入れましたるところ、一應お坐敷の御都合お訊れ申して見ませうほどに、先づ暫らくお待ち下されひと申しましたに依り、お控え申し居りましたるところ、差支えなきほどに、通れとの御意、其れにて斯はお邪摩いたして御座りました。

『オヽ……左様で御座つたか、如何なる御意見かは存ぜれども、先づ十分に御休息なされた其の上にて、篤と承はるで御座らふと、内藏助が云ふてゐるところへ、例の小間遣のお花は入つて來て、同じく錦手の臺盃を三人の前へ一つづゝ置き、而して其處に置かれてあつた、保命酒の徳利を取りて注ぐのである。

『イヤ……モウ何うぞ、お構ひ下さりませぬやうに、我々どもは今し方、午の仕度をかれて、少々大高姓の許にて、戴ひて御座ればと、安兵衛は云ふ。

『其の御斟酌には及び申さぬお、茶の代りに只一口……源藏どのには、甘ふて些と不向ならむも、先づお附合に、一二杯過されひ、アハヽヽヽ……

『恐れ入つて御座りまする、左様なれば遠慮なく、頂戴いたすで御座りませうと、作法なれば老人方に會釋して、三人は等しく其の保命酒を飲む、雨はいよ〳〵烈しく、風は益々加はりて、暴風雨の狀態に變じ、樹々の梢を拂ふ音、物騒がしくも亦た凄まじし。

『強ひ兎に爲り申したなと、原惣右衛門は云ひつゝ、更に言葉を改めて、時に堀部姓、何にやら方々の御意見を、御家老のお耳にまで、お入れ申したきとの御事、如何樣なる御意見かは、我々どもの素より存ぜぬ儀で御座るが、我々が此れにぬて、承はつても差支の無き儀で御座らば、仰せられひ、若し又た差支のあると云ふ儀で御座らば、我々は打ち揃ふて、遠慮いたしまするに依り、御斟酌なく、お取り計ひなる下されひとの光もなる口上に。

『イヤ方々が此れに御座あつて、お聞き取り下さらば、この上もなき頂上の儀に御座りまする、我々が御家老へ、御面會の儀、御遠慮申そふかと存ぜしは、方々と御家老とのお物語りに付き、萬ケ一にも我々がゐて、お妨げに爲るやうなことのあつては、恐れ入る儀と斯樣に存じ申したに依り、其れにてお差支の御座らば、又た出直して明日にも、罷り出ると斯樣に申したので御座りましたと、赤垣源藏の言葉であつた。

『オヽ左樣で御座りましたか、然らば方々の御意見と申すを、此にて我々ども、承はるで御座りませうと、吉田忠左衛門は云ふ。

『方々がお聞きに相成つても、お差支えのなき儀に御座らば、御遠慮なく仰せ聞かされひ、篤と承はるで御座らふほどにと、内藏助の言葉に、然らばお聞き取のほど願ばしゆふ存じ申すと、安兵衛は云ふて、而して一同の顏を靜かに見廻す、すると大高源吾が。

『斯く御家老を始め、方々のお許が御座りましたる上からは、堀部姓、お身より委しゆふお話し申し上げて下されひ。

『左樣で御座るか、其れでは御兩所に成り變つて、拙者よりお物語りいたすで御座りませうと、安兵衛は居住居を正して、兩手を膝に置く、内藏助を始め一同も、作法なれば威儀を正すのであつた。

『別儀にても御座りませれど、一昨日御會議の節、吉田殿を御始めとして、先輩の方々が、殉死して亡君の御供つかまつり、冥途にてお伽申上げては、如何にやとのお言葉にて、我々どもへ御相談が御座り申した、右に付き我等三人の意見をば、御家老へ申し出でたくと存じて、罷り出ましたので御座りますること、先づ云ひ出づるのである。

『成るほど、シテ殉死の御相談に就いて、方々の御意見と申すは、如何樣なる儀で御座るかなと、内藏助は安兵衛の顏を眺める、忠左衛門も十内も、惣右衛門

も、互ひに云ひ合したやうに、亦た安兵衛の顔を靜かに眺める。

『殉死との御相談が御座りましたが、我々は追腹仕つるは最と易きこと、併りながら追腹つかまつゝたところ、何んの役にも立ち申さぬ儀と存ぜられまするに依り、殉死の御相談には、徹頭徹尾贊成いたしかれまするに依り、御辭退申し上げたくと存じまするので御座りますれば、御家老を始め、方々に於せられても、此の儀御承知置きのほどを、幾重にも願ひ上げまするとと、安兵衛憚かるところなく、キッパリと云ひ切るのである。

『すりや方々は、殉死の儀はいやじやと仰ぜられるので御座るなと、内藏助は靜かに云ふて、靜かに打ち點くと、威儀を正して聞ぬてゐた、源吾の叔父の小野寺十内が、何んと思案してか一膝前へ繰り出でゝ。

『安兵衛どのゝ御口上、確と承ばつて御座るが、其れでは源吾、其方も殉死は嫌じやと云やるのじやなと、叔父甥の間柄、誰に遠慮もなきまゝに、十

内は斯く云ふて改めて訊れた。

『如何にもお言葉では御座りますれど、源吾奴、頓んと殉死つかまつりまする精神には爲り申しませぬと、其れより源吾の許にて、三人が相談なしたる一部始終の容子を、委しゆふ物語つたのであつた。

聞き終つたる老人株三人は、ウーム……と云ひたるのみにて、互ひに顔を見合せつゝ、無言でゐたは、察するところ、此れに對して内藏助が、如何なる返答をいたさるゝか、其れを聞かふとてゞあらふと思はれるのである。

内藏助も亦た無言にて、何にやら思案に暮れてゐたが、稍あつて、ニタリと打ち點づきながら、成るほど方々の御意見、十分に得心な參り申した、と云ひつゝ我が前に置かれてあつた、保命酒の盛れてる錦手の盃を取り上げて、酒を飲みつゝ、又た何にやら思案に暮れてゐたが軈て。

『すりやお身達は、追腹いたしたところで、亡君のお爲めには毛頭ならぬ、其

れよりはお爲めになることをいたして、切ろ腹ならば切いたいと云はるゝので御座るな……ウム如何にも……

『併し御家老、殉死つかまつゝて亡君の御役に、相立つと云ふことの御座りまするば、我々は素より、一命を我が君に棒げ奉つて、御奉公いたしましたるもの、生命は更々惜しみはいたしませぬ、なれど犬死は好まぬところ、左ればお殉死つかまつれば此れ此れのお役に立つと云ふ、理由が御座りまするならば何うぞ我々の得心の參りまするやう、お聞かせのほどを、幾重にも願ひとふ存じまする。

『ヤア御尤も千萬、その樣に云はれては、内藏助何んと御返答ないたしてよろしきやら、大ゐに困り申す、如何にもお身達の云はるゝ通り、殉死つかまつゝたところで、何んのお役にも立つ申さぬ、併し殉死は武士道の精神じやて、アハヽヽ……其れでは、お身達は亡君のお役に立つことをいたして、棄ろ生命

なれば、棄てたいと云はれるので御座るなと、内藏助の言葉は強う重つて來たやうである。

此の時に、三人は唯だお役に立つことをいたして棄ろ生命ならば棄てたいと云ふたのみにて、上野介の首級を得たいと云ふ、極意の考は未だ漏さなんだのであつたとみえる、其れ故に内藏助が、言葉に力を入れて、斯樣な問を改めて、起したのであつたのである。

『如何にも左樣で御座りますると、安兵衛はキツパリ云ひ切る、ウム御尤も千萬なれど、我が君は此の世に居られ申さぬ、然るにお役に立つことを、何かいたしたいと云はるゝが、其りや些と無理なお考へかと思はれ申すじや、身許も殉死は武士道の精神なれども、併し亡君のお役には何んにも立ち申さぬ、左れば何にか亡君のお役に立つことがあらば、此の際、進んでいたしたいとは、云はず語らずの中に考へて居る左は併りながら、差し當つて斯ふと云ふ考

えがつかぬ。就いてはお身達に於て、何にか好きお考へがあらば、遠慮なふ語り聞かされひ、其れ聞くは身許の願ふてもなき好むところじやと、内藏助の言葉に、安兵衛始め三人は、互ひに顔を見合せた、吉田忠左衛門等三人は無言で、ニタリ……ニタリ……とホヽ笑むでゐたのである。

大石内藏助は、勿論殉死なぞと云ふ考えは、毛頭なかつたのである、吉田も小野寺も將た原も、亦た勿論此の際、殉死しやうなぞと云ふ考えはなかつた、然るに前々日の大會議の席に於て、吉田や小野寺等が、殉死說を持ち出して一同に相談を何故に始めたかと云ふに、此れは全く一同の精神を試してみやうと云ふ、考へであつたので、其の實内藏助の考えは、淺野家が此のまゝ斷絕すると云ふのは、口惜いから、亡君の御舍弟なる大學どのを立てゝ、淺野家の後を襲するやうに、將軍家へお願ひ申したいと云ふのが心願であつた其れで若も此の心願が、將軍家の御採用に相成らずして、愈々お家斷絕と確

定せば、其の時には恨み重なれる、上野介の首級を頂戴いたそふ、即ち仇を報ひやうと云ふのが、動かすべからざりし決心であつたのである、なれど復讐と云ふことは、其の頃幕府の大禁制であつた、併のみならず萬が一にも赤穗の浪士が主君の恨を晴さんと、決心してゐるなぞと云ふことが、吉良家の耳へ入りなば、何にかと事が面倒である、其れで内藏助は、我が決心を嘘にも漏さなんだ、漏さずして其れとなふ、一同の心膽を試さんとはしてゐたのであつた、此の事は此に委しく述べずとも、讀者は十分に御承知の事と存ずるのである。

内藏助の心底は斯の如くであつたが、安兵衛等は素より知らふ筈がない、其れで今亡君のお役に相立つ、方法があれば、遠慮なふ聞かせて呉れ、好むところであると云はれて、互ひに顔と顔とを見合せてゐた、安兵衛が一膝前へ繰り出でゝ、左樣なれば三人に爲り代り、拙者奴が其の方法と申しまするのを、言

上いたすで御座りませうほどに、恐れながら篤とお聞き取のほどを、願いとふ存じますると云ふて、一同の顔をジロリと見廻したは、如何にも深き容子のあるらしいのである。

流石は内藏助なり、物語らんと云ひ出でたる安兵衛の容子を、早くも見て取つて、此は何にか十分に、仔細のあることらしい、此の席にて如何樣なること物語らるゝも、差支えは更々なけれども其の事柄に依つては、家内の者の耳へも決して入れられぬことありと、考へられたからして。

『安兵衛どの、如何樣なる御意見かは、存ぜれども、身許少しく考ふることあらば、物語らるゝこと、先づ暫らく待たれひと云ふて止めた。

ハッと安兵衛は其のまゝ、云ひ出でんとせし口をくゞむだ、内藏助はポン〳〵と手を叩く、ハイと返答て立ち出でたは、悴の主税良金である。

『ホ、松之亟か（松之亟とは主税の幼名である）アノ料紙と、硯を花に此れへ持たせて呉りや、而して手を叩くまでは、此の席へ誰れも立ち入ること相成らぬ、少しく密談のいたしたければ、此の儀は其方に確と申し聞かせ置くほどにと、云はるゝ、心得まして御座りますると、主税は其のまゝ引き下る、間もなくお花は料紙に硯を添えて持つて來る、而して内藏助の前へ差し出して、靜かに引き下がる。

この時に勢ゐ凄まじく、吹き荒れてゐた風は、幾時しか凪ぎて、雨も亦たパッタリと歇み、而して斷絶の雲間より、夕陽の光が薄紅を刷いだやうに射し初めた、左れど樹々の葉露は、ポタリ……ポタリ……と落ちてゐて、雨上りの初夏の夕景色を、遺憾なく表はしてゐる。

○雨歇て意志投合す

内藏助は一座を見廻しながら、靜かに打ち突つきて料紙と硯とを、安兵衛の前

へ押しやりて。

『何にや彼やらと、色々の事を考へ、又た御家中の方々より、種々の事を仰せ聞けられるので、内藏助の心は、宛然鼎の湯が、煮へ立つてゐるやうで御座る、左ればお言葉にて承り置きて、萬ケ一にも失念いたしては、誠に申し譯なき次第で御座るじや、就いては御手數恐れ入り申すが、其れなる料紙へ、御所存のほど、お認めな下さりませぬか、委しゆふ無ふても宜しい、肝心な點だけをと云はれる。

心得まして御座りますると、安兵衛は料紙と硯とを、我が前へ引き寄せて、何にやらむ認め初めたのである。

『吉田姓、雨が晴れたらモウ夕暮で御座る、サア一と口過ごされひ、お酌いたすで御座らふ、十内どのも如何で御座る、惣右衛門どのも如何で御座ると、内藏助は如才なく勧めてゐる、其の中に安兵衛は復讐の事を、認めて内藏助へ差

し出す。

『お認め下されたか、其れは御手數千萬で御座つた、ドレ拜見いたすで御座らふと、其の紙を取り上げて讀み終つたが、其れをそのまゝ自分の隣に座つてゐた、忠左衛門に渡される、而して内藏助は兩眼を閉ぢつゝ、何にやら思案に暮れて居られた、其の中に忠左衛門も十内も惣右衛門も、讀み終つて、其の書附は再び内藏助の許へ戻つた。

内藏助は其を受取ると、そのまゝグルグルと丸めて、我が前にあつた手焙の中へ投り込み、火をかき立てたから、瞬間時に形を止めず、灰と爲つて仕舞ふた、然らばお身達はと、云ひかけて言葉を潜めつ。

『只今灰となつたる書附が、お身達の希望に御座りまするなと、力をこめて念を押す、三人は言葉を揃へて、御意に御座りますると云ふ。

『如何にもお身方の御意見は、亡君のお爲めに強う相成り申す、其の御精神を

黄泉におはす我が身が、御承知あそばされたらば、嘸かし御満足に思召すことで御座らふ、其のお心を承はつて、拙者も有がたく存ずるが、併し其の企畫は、實に容易ならぬこと、方々の御精神は、金石も啻ならぬにもせよ、さて實行の一段と相成つては、楮の花を吹き落さんとするよりも尚ほ難し、若し不覺を取られた曉には、赤穂の浪士は、主に訣れ扶持に離れた無念さの行る瀬なきまゝに、亂心に及んだなぞと云はれては、實に此の上もなき亡君の御恥辱であらふかと存ぜらるゝが、此の儀に就きては、方々何にか御成算が御座り申すかなと、内藏助は改めて訊ねる、すると傍より小野寺十内が、一膝前へ進み出でゝ、言葉を潜め。

『方々の御精神は、天晴れ見上て頼母敷、拙者等も満足に存じ申すが、さて只今内藏助殿の仰せあそばされたる通り、其の實行が強う面倒、如何に勇敢決死の武將なればとて、二人や三人にては、如何ほどに小さき城といへども、

陥れんことは成り難し、此れと事實は素より異なれども、同理は一つ、此れに付いて、何にか善き御分別がおはすなら、身許等は勿論大の賛成、願ふても其の一咏の中に、加はるで御座るが……

と云はれて、三人は只今のところにては、素より彼して斯うしてと云ふ成算はついてゐない、唯だ殉死など爲すは、愚な骨頂じや、其れよりは亡君の御無念をお晴し申して、腹かき切るが、此の際臣たる者の本分じやと、斯う決定したのみである、然るに實行と云ふことに就ての、成算ありやと、問はれたので、直ちに返答は出なんだ。

『左樣で御座りまする、只今のところでは、右の如き決心を定めましたるのみで、實行の手段に就きましては、未だ左右の考えも何にも御座りませぬ、なれど云ふは易ふして、行ふは此の上もなき至難の事とは、我々ども、十分に承知いたし居りますると、堀部安兵衛は先づ取り敢ず返答する。

『デ御座りますれば、此の事を御家老にまで申し出で、一つには一昨日御會議の節に、宿題と爲つて居りましたる、殉死の儀に就きて、お斷を申し上げ、二つには此の事を御家老に、お勸め申し上げて、實行の御智惠萬端を、御一任いたし度と、斯樣に存じて罷り出ましたので御座りまするとは、大高源吾が、云ひ出でたる返答であつたのである。

ウーム……と云ひたるのみにて、内藏助は無言で、思案に暮れてゐる、すると今度は、吉田忠左衛門が其れへ進み出で。

『如何にも御立派なるお考えで御座るが、併し萬ケ一にも、お身方の御意見に内藏助殿が御賛成でなかつたならば、お身達は如何いたさるゝお考えで御座るかな、斯樣なことは聞かひでも可きことなれど、話の序手で御座ればなアと何にやらむ、仔細のあるらしき、忠左衛門の言葉に。

『左樣で御座りまする、此れに上越す君恩の、報ひ樣は此の際御座りますまゐ

かと、慮外ながら我々は考へまして御座りました、其れと同時に、憚かりながら、御家老も斯の如き、御心底で御座らふと存じ申して御座りまする、其れゆへに、此の事を申し上げなば、必らず御賛成下さるゝに相違あるまゐと存じられまして御座りまする、なれども又た御家老のお考えにて、此の外に、何にか優れた御名案が御座りまするならば、我々は勿論、その方にお從ひ申し上げとふ御座りまする、けれどもが萬々一、此の意見に不賛成であると仰せられ、又た他に名案はない、殉死いたすのみであるとの御意に御座りましたならば、據處御座りませぬに依り、我々は他に同志の士を募りて、此の事を決行いたしたき、所存に御座りまするとと、源吾はキッパリと云ふ。

『只今太高姓の云はれましたる通り、事の爲る爲らぬは之を天に任して、斷行いたす決心に御座りまする、其れが爲めに、如何なることのあるも、此の誓は破るまじと云ふ、盟約といたして、三人が只今血を、すゝり合ふて參つて御

座りますると、赤垣源藏が決心のほどを云ひ、且つ示めしたのであつた。

吉田忠左衛門は、三人の顏を信度打ちまもつてゐたが、如何にも其の決心のほどが鑑圖にして、動かすべからざるを見て取つてか、老顏に一種の名狀すべからざる笑を漂へつゝ、さも嬉しそふな容子にて。

『能ふ云はれた、御家老を始め我々共も、實はお身等と同一の考へで御座つたじや、と、云へば忠左衛門何にを云ふ、一昨日會議の席上に於て、殉死の發議をいたし置きながらと、お身達或ひは云はれんが、彼れは全く御家中、御一同の御精神を、試さむ我等の手段で御座つたじや、死を以て亡君の御鴻恩に報ぬ奉る、精神の方々は兎も角も、然らざる方々は、殉死と聞ねて、必らず暇を乞ふに定まつてゐる、暇を乞ふ者に遣はし、殉死を乞ふ者は殘し置き、而して此の方々なれば、何れも精忠無二の御方であると、選り拔いて見込を立て、其の上にて復讐の御相談を、始めていたすべくと存じて居つたので御座るじや、斯る折から方々の精忠至誠なる御心根を承はり、斯ばかり嬉しいことは御はさぬで御座ると、忠左衛門は三人の心膽を、十分に見拔きて、此に意中を吐露したのであつた。

『只今吉田姓の仰せられたる通りの次第なれば、萬事は身許が追て御相談を いたし、決して惡ゆふは取斗らい申さぬに依つて、先づ緩々と時の來たるを、待たられよと、內藏助は云ひ聞かしぬ。

三人は宛然千萬金の寶を得たるかの如くに打ち喜びて、左樣で御座りましたか、左樣とは存ぜず、殉死のことを彼れ是れと、非難つかまつり、失禮の段平にお許しあそばされて下さりませと、三人は口を揃へて挨拶するのである。

『其の御挨拶は痛み入る、なれど方々、御如才は素より御座るまゐが、拙者より改めて、右の儀に付き御相談申し上るまで、此の事夢色にも、お表し相成らぬやう、お賴み申しまするぞやと、內藏助は注意をする。

『重々心得て居りまする』と、安兵衛がお請けをして、然らば方々お暇いたそふでは御座りませぬかなと、云ふと内藏助が。

『お話が濟んだら、お身達は最早や御閑散で御座らふ、其れとも亦た此れより、何方かへお越しに相成る御都合にて御座るかなと訊れる。

『イヤ何方へも、參る用事と云ふては御座りませぬ……何にか御用事にても御座りますなら、御斟酌なく仰せ聞けられて下さりませとは、安兵衛の返答であつたのである。

『イヤ別に用事と云ふては御座らぬじや、なれど最早や夕暮れじや、幸ひ吉田姓も、小野寺姓も、原姓もおぬでじや、其れで久し振で、一酌催ふそふと存する、お身達も御閑散ならば、雨上りのこの夕景色を下物に、一ト口酌みたいじや、アハヽヽヽ……

『何んと仰せられまするか、其れでは我々どもへ、夕餐の御酒を下さりまする

と、云はれまするかなと、大高源吾は片手を突きて云ふ。

『如何にも着と云ふてはなけれど、志の相齊しき方々と共々に夕景色を眺めながら、一酌交ずは一興だと存じてな、アハヽヽヽ……

『恐れ入りまして御座りまするなと、安兵衛の言葉が終らざる中に、赤垣源藏が、堀部姓にも大高姓にも、御家老が折角の厚きお志、御辭退申し上るは失禮で御座れば、遠慮なふ頂戴いたとふては御座らぬか。

『赤垣姓には何によりの好物で御座れば、御尤もなるお言葉……イヤナニ、御遠慮申し上ぐべきでは御座れど、折角の御誼なれば、有がたく頂戴いたすで御座りませう……のう堀部姓と源吾は云ふ。

『然らば有がたく、頂戴いたすで御座りませうわいと、此に三人は御神輿を据へたのであつた、その中に内藏助が云ひ附け置かれたるものとみえて、手製なれども、主客合して七人前の膳部は、お花の手に依つて、ズラリと運ばれた

のであつた。

『お引き止め申し、さて方々のお口に叶ふものと云ふては、更に御座らぬが、酒は聊か用意いたし居りますれば、十分に召し飲り下されと、其れより主客は打ち寛ぎて、世間話に酒興を添へ、各々微醉を帶びて、初夜の鐘を前後に、別々に爲つて立ち歸つたのであつた。

此れより再三再四の會議を開かれて、同志の士は、其々連判狀に血判をする城は内藏助が心膽を碎ひての取計ひに依つて、作法亂さず明渡す、不忠の徒輩は分配金を懷中に捻じ込んで、勝手に赤穗を退散する、此れ等の委しき事實は、義士復讐の書籍に依り、讀者は其々十分に御承知のことゝ存ぜらるれば此には敢て語らず、進んで赤穗城明渡し後に於ける、大高源吾忠雄が精忠至誠なる活動に移らむ。

○源吾赤穗を去る

榮枯盛衰は世の習いとは云へ、淺野家の不幸は、實に夢のごとくである、世が世ならば、裃姿の威めしく、往來する身も、今は住み馴れたる赤穗の町でさへ、遠慮して通られねばならぬ果敢なき身上となつたる大高源吾、深編笠に炎天の暑氣を防ぎ、着流し羽織に大小を落し差にして、アヽ斯る身の上と相成つたも、此れ皆な吉良上野介義央奴が、奸智より出でたること、已れ此の恨み早晩晴さで置くべきかと、心の中にて斯樣ことを思ひながら、ブラブラと我が家へ戻つて來た。

『オヽ兄さん、お歸りで御座んすか、今日は別してお暑う御座りましたゆえ、サヽ早う行水をあそばしませ、モウお歸りあそばす頃と存じまして、お湯を沸して置きまして御座りまするとと、優しき妹の言葉に。

『左樣か其れは親切に……母上は、モウ行水あそばしたかなと、訊れつゝ源吾は浴衣と着替る。

妹は今脱ぎ棄てた、源吾の衣物を衣行にかけながら、ハイ母樣は先刻、モウお使ひあそばしまして、只今スヤ〳〵とお心持ちよふ、お午睡をあそばして居られまする。

『其れでは俺も、使はして貰ほふ、其方氣の毒じやが、湯を取つて呉りやれぬか、心得まして御座りまするとゝ、妹は大盥へ湯を取り、水を加えて湯加減を能くする、源吾は其のまゝ入つて、アゝ快い心持じや、熱ひ時には冷い物を食るよりは、湯が一番に可い……何によりの馳走じや、アハゝゝ妹は後より、兄さんお流し申しませうか……オゝ其れでは、氣の毒ながら雜とで可いから、流して呉りやれぬか、炎天を歩き廻つて來たので、强う汗に爲つて居るゆへと、云へば甲斐々々しくも妹は兄の肩を流す。

源吾は、此れが妹に身躰を流して貰ふ仕舞じやと思ふてか、何にやら深き思案に暮れてゐたが、稍めつてモウ結構じや、十分じや、アゝ快い心持に相成つたわい、ヤレ〳〵御苦勞であつたと、源吾は湯より上る、而して我が部屋へ戻つて、例の通り椽に座つて、庭を眺めながら、團扇使をして風を呼んでゐるところへ、妹は煎茶を入れて持つて來る、源吾はその煎茶を喫みながら、仔細あり氣に妹の顏を眺めてゐる。

妹は兄の容子の變なのを、肩を流しながらに悟つたが、併し何うかなされましたのかと、訊れる譯にもゆかぬから、左ちぬ体でゐたが、今ック〳〵と我が顏を、容子あり氣に眺めらるゝより。

『兄さん、何うかあそばしまして御座りまするか、御氣分にても、お惡ふ御座りまするかと、涼しい眼元に愛嬌を漂へながら、ジロリと兄の横顏を眺めて訊れる、訊れられて源吾は。

『アハヽヽ……平素とは、俺の容子が異ふて見ゆるかな……ウーム……さても爭そはれぬものじやな……が、併し何處も身體は惡ゆふはない、又た氣分も至つて快いじや、なれど母上と其方とに、暫らく別れねばならぬので、家の仕末を何うつけやうかと、其の事を考へてゐるので、其れで容子が變に見へるのであらふわいと、云ふて喫みかけの茶を喫む。

大低の者なれば、別れねば爲らぬとの言葉を聞ぬて、仰天するのであるが、流石は源吾の妹なり、遲かれ早かれ別れねば爲らぬとは、豫ての覺悟なれば、少しも驚ろかない、オヽ左樣で御座んすかと、靜かに點きて。

『シテ何時より、貴方は何方へお越しで。御座りまするか、御家老樣にも京都へお越しあそばされ叔父上樣にも、京都へ早やお立ちあそばされたる今日此頃、遲かれ早かれ兄上樣にも、何方かへお越しあそばされねば爲りますまゐと存じてば居りまずるがと、云い來たれるを皆なまで聞かず。

『其方、母上の御部屋へ參つて、お目覺か否や、御容子を一寸と伺ふて來て吳りやれぬかな……ハイと立ち上らんとするを。

『アヽ……左樣してな、お目覺であつたならば、俺が戻つてゐる、お目にかゝりたいと云ふてゐると云ふて吳りやれ……妹は打ち突ひて、靜かに立つて行つたが、間もなく戻つて來て。

『お目覺でゐらせられまする、お戻りの容子、申し上げましたら、此れへ呼びやとの仰せで御座りましたゆへ、御都合にてお越しあそばされましてはと云ふので、然らば直に御意得やう、衣服を取つて吳りやれと、作法は正しい、浴衣を脫ぎて衣物を着替え、羽織を着て、母の部屋へ行く。

源吾の母は、小野寺十內の妹であつて、十內にも劣らぬ貞淑の賢婦人である、後年に至つて剃髮して尼と爲り、世を遁れて亡君の菩提と、義士の靈魂とを弔ふたと云ふ女性であるから、疾より源吾の精神を見拔て、復讐の快擧を企

だてんとせるた察してゐる。

源吾も亦た母の精神を能く知つてゐる、なれども方々と同盟して、亡君の御無念を晴らさんとするのであると云ふことは、顔色にも表はさなんだ、此れは親兄弟妻子の間といへども、口外せぬと云ふ、堅約が互ひに結んであるからである、けれども賢明なる母は、疾より源吾の精神を見拔て、其れと十分に察してゐる、併りながら其の察してゐると云ふことの素振を、色にも表はさない。

『母上、お目覺で御座りまするか、今し方戻りまして、妹に御客子を訊れましたるところ、お湯をめされて、御午睡の御最中とのことに、其れでは身許も行水いたそふと、一寸と洗ひまして御座りました。

『オヽ……左樣であつたか、今日は別して暑氣が烈しいので、早く行水いたし心持も強う快しうなつたので、ツイトロ〳〵と一寢しました。

『時に母上、惣右衛門殿の許へ參りましたるところ、原殿には、明日大阪の

方へお越しに相成るよしにて、御老母樣が御内儀をお相手に、留守いたされるとのことで御座りました、で、惣右衛門殿にお暇乞を爲し、又た御老母さまにも御内方にも、其れ其れ御挨拶いたして、お別れ申して御座りました。

『ウーム……其れでは、惣右衛門樣には、明日大阪の方へお越しに爲ると云はるゝのかな……オヽ……其れは其れは……と老母は打ち點く。

『就きましては、叔父上（小野寺十内のこと）にも、御家老のお後を慕ふて京都へお移りに爲り、又た堀部姓も江戸表へお越しに相成つて了ふ、其の他吉田樣を始め、赤垣姓、武林姓など、殊更に拙者奴が、熟懇に願ふて居りました る方々も、皆な其れ其れに、思ひ思ひの處へ御退散いたされましたし、今亦た先輩とも仰ぎ、兄上とも敬ふて居りましたる、原惣右衛門樣も、大阪へ御退散との儀に御座りまする、左すれば殘るは拙者のみと申すやうなる次第に御座りまする、其れゆえにと申す儀には更々御座りませれど、拙者も暫らく京都に住

ぬて、風流に心を傾けとふ存じまする、斷絶いたせしお家の御不幸を他處に見て、都へ住居を移し、風流三昧に世を送らんと申せば、母上にも妹にも、さて〳〵不忠な者と、或は思召されませう、なれど此の土地に居りましたるところで、矢張遊んで暮しまする身の上へ、二つには、浪人姿を、元の御領内の人々に見られるのが、強う面白ふ御座りませぬ、其れで京都にて暫らく住ひたいと存じまする、京都へ參りますれば御家老樣も居られまする、又た知己の方々も居られまることゆへ、何にかと心丈夫、又た互ひに往來もいたされ相談相手にも爲りますればと、斯樣に存じましたので、お暇の儀をお願ひ申したくと存じまするので御座りまする、お年めされた母上と、年まだゆかぬ妹とを殘して、拙者一人京都へ參りまするは、此の上もなき不孝では御座りますれども何んとぞお許しのほどを、幾重にもお願ひ申し上げますると云ふて賴む。

麻の坐布團の上に悠然と坐り、兩眼を閉じて、源吾の云ふことを殘らず聞き終

りたる老母は。

『其れでは其方も、京都へ行きたい、都へ參れば御家老を初め、昵懇にいたせし家中の方々が居らるゝゆえ、何にかの時には、相談相手に爲るからと、斯樣に云ひやるのじやのうと、その相談相手と云ふ言葉に、一段の力を入れ、而して殊更に念を押すやうに云はれるのである。

『ハイ御意に御座りまする……と云ふて、後は無言……老母も亦た無言で、何にやら思案に暮れてゐたが、軈て靜かに打ち點きつゝ。

『其んなら暇を遣はしませうほどに、俺等の事には心を配らずに、緩々と行きやるが可い、シテ行きやるとすれば、何時出立いたさるゝかな。

『左樣なれば、お暇を下し置かれまするか、お暇さへ下し置かれますれば、別段に仕度と申しては御座りませぬ身の上へ、明日中に母上樣のお住居を、何方かにお搜し申し、お移りを願ふた上にて、出立いたしたく存じまする、御

承知にてもあらせられまする通り、此の住居は此の月中に、引き拂はれば爲りませぬゆへと、云ふを皆まで聞かず。

『この家のことは、妾が仕末をいたして、近在の村里へ引き移るほどに、其方は明日にても、明後日にても、立とふと思ふ日に立たりや。

『左樣で御座りまするか、然らば重れ重れ母上樣に、御迷惑を相掛け、恐れ入つて御座りますれど、家のことさえ御仕末願はれますれば、明日の夕景に城下を離れとう存じまする、而して京都へ着いたしましたら、差し當り御家老のお住居に御厄介に相成り、其れから緩々と住宅を搜す積に御座りますると云ふ、母は聞き終つて、幾度か打ち點き、而して暫らく思案をしてゐたが、其れでは明日の夕方に、城下を離れたいと云やるのじやな……ウム、其れでは左樣しやるが可い、と云つて妹に向ひ、モウ何時頃じやなと訊れる、妹は左樣で御座りまする、モウ彼れ是れ未下りで御座りませう、未下りと云へば、

今の時間で五時である。

『モウ未下りか、其れでは其方氣の毒なれど、明日源吾が京都へ立ちたいと云やるから、途出を祝ふ酒宴をいたしたいに依つて、其の仕度をいたして呉りやれぬか、親子三人が夕風をあびながら、水入ずの酒宴も、久し振にて樂しからふ、サヽ早う仕度をいたしや、心得まして御座りますると、立ち上らんとするを、アヽ一寸と待ちやと云ふ。

ハイと妹は起ちかゝつた膝を下す、アノ明日源吾に別れては、又た幾時會へるやも知れぬほどに、十分御馳走で、御酒を戴きたいと思ふゆえ、辛度序手に城下まで行つて、仕出を誂らへて來て呉りやれぬか。

母の命令素より反かるべき筈がないが、城下よりお料理を取り寄せよとは、近頃にない母の仰せ、ハテ合點のゆかぬことゝ、思ひながらも、ハイ畏まりまして御座りますると、妹は其のまゝ身仕度をして出て行く。

母は口へ出してこそ云はれど、源吾の意中を十分に承知してゐる、今日原惣右衛門の許へ行きて歸ると、其のまゝ俄かに、京都へ行きたいと云ひ出でしは、何にか打ち合せをして、御家老や其の他の方々と、事を計らむ考へに相違ない左ずれば明日別れては、又た幾時會ふ時のあるやも知れず、殊には自分は老年の身、今は健康に左右の變と云ふてはなけれど、人は病の器、何時何んなことがあらむも知れずと、斯ふ考へて、左てこそ別の盃を親子三人にて、花々しく酌み交さんと思案したのである。

兩手を膝に置き、無言のまゝで、妹の立ち去るを見送つてゐた源吾は、何にやら靜かに打ち點きて、片脇に在りし團扇を取り上げ、母の身體を靜かに煽ぎながら。

『お年寄られし母上を、お殘し申して、血氣盛りの私奴が、都へ移つて好める風流の道に、心を慰さめんとは、此の上もなき不孝の至りでは御座りますれ

ど、惡からずお許しのほどを、願ひ上げまするとと云へば、母は煙草盆を引き寄せて、煙管に煙草を詰めながら。

『其方が當地にゐやつたところで、爲すこともなく遊んでゐる身、左れば都へ行きて、御家中の方々と、御相談申して、一日も早ふ本望……

『エヽッ……と、源吾は思はず團扇を其れへ置きて、顏色を變た、母はオホヽヽヽ……一日も長く物の本を讀みて、天晴れ風流の達人に爲り、俳諧師で餘生を送らるゝやうにいたされよ、忠臣は二君に見へずとか云ふ教のある通り、其方は餘も、主取をいたす氣なぞはあるまじければ、俳諧師と爲つて、一生を送らるゝがよろしからふで、オホヽヽヽ……と母は言葉を他へ、そらせた、なれども源吾は母の意中を、早くも悟つた、ウムさては母上には、我々同志が秘密の契約を、其れと御推察あそばされてゐらるゝなと會得したが、併し飽までも左あらぬ體にて。

『アハヽヽ……母上、俳諧で餘生を送りますると云ふことは、中々に骨の折れますることで御座る、なれども座して食へば山をも空しとやら、左れば何事をかいたされば相成りませぬ、と云つて御奉公の道よりは、他に心得の御座りませぬ私のことで御座りますれば、先づ習ひ覺えた俳諧師にでも、爲るが宜しからふかと存じたので御座りまする、併し俳諧師に爲るために、京都へ行くとは、何んぼうでも餘りに、あつかましゆふ御座りまするので、其れと明らさまに得申し上げなんだので御座りましたと、濁らす母の言葉に、自分も亦た調子を合せて、斯くは體よく云ふ。

『左樣であらふとも、俳諧を勵まるゝには、都でなくては爲りませぬわい、又た俳諧にて餘生を送らふとするには、何うしても都でなふては爲らぬ、姿は其れと其方の心を察して、都へ行きたいと云ふ、其方の頼を快ふ承知したので御座るぞや、なれど源吾と母の言葉は重る……ハイと思はず源吾は、其れへ兩

手を突きて、頭を少しく下げる。

『其方俳諧に心を傾むけらるゝとも、亡君より戴きたる御厚恩は、餘も忘却はいたされまぬな、母が今改めて云ふまでゞもないが、其方は御家中で、殊更に亡君の御恩に預かつて居られた身なるぞよ。

『ハイ……不肖と雖も大高源吾、亡き父上の御血と、母上の御血とが、一つに爲つて體内を廻り居りますれば、其の儀は御安堵あそばされて下さりませ、亡君の御厚恩を忘却いたしませればこそ、京都へ參つて、俳諧師に爲りたいと存じまするので御座りまする。

『亡君の御厚恩を忘却いたされば、大高家の御先祖を辱しむるが如きことも餘もあるまじと、云つて靜かに打ち點げば。

『素よりに御座りまする、假令ひ俳諧師となつて、一身の生活を續けることの出來ませいでも、他家へ奉公いたすことは、勿論、人樣より大高源吾は、彼

の様なと後指を指るゝが如きことは、天地神明に誓つて仕りませねば、お心安くおゐでであそばされて下さりませと云ふ。

『其れ聞ゐて妾も安堵……イヤナニ強う喜ばしい、就ては妾は、モウ何にも云ひませぬほどに、都へ上つて一心に俳諧の道を勵まれひだがのう、源吾と、母は我が子の顔を眺と打ち眺めて。

『餘り強う俳諧に凝やるゝとな、ツイ文弱に流れて、武道がお留守に爲り申す、アハヽヽ……斯んなことは妾が云はひでも、其方は能う知つてゐやるうが、なれども老年の子を思ふ心でな、左れば俳諧に心を傾けらるゝ傍ら、武を研くと云ふ心掛が肝心で御座るぞや實は便にせる其方の傍にゐて、其方の行末を見屆けたいは、妾の心願じや、其れゆへに其方が都へ行きやるなら、妾も一所に行きたいは山々、併りながら一家諸共この土地を離れては、御家御代々のお墓詣でをする者もなく、又た大高家代々の墓を守る者もない、左れば妾は

此の土地に止まつて、お墓の守護をいたすゆへ、其方は天晴れ大高家の名を揚げるやうにいたされよと、母は其れとなふ大義を重じ、忠節を勵めよやと、云はず語らずの中に諭したのであつた。

源吾は母の言葉、一々身に泌みて、有がとう存じまする、決して家門に傷をつくるが如きことはいたしませねば、御安堵あそばされて下さりませと云つて、母の心を休めてゐる、折から妹は戻つて來て、只今お料理が參りまするとと云へば、左樣なら座敷へ仕度をしや、ハイと妹は其れより、座敷へ其々の仕度をする、其の中に料理が來る、此に親子三人が、別の盃を交しつゝ、四方山の話に初夜の鐘を聞ゐて、其々寢に就いた。

其の翌日早朝より旅の仕度を調へて、源吾は妹に城下まで見送られて、此に別れを告げつ、只だ一人都路差して城下を離れたは、元祿十四年六月の下旬であつたのである。

○源吾の都住居

源吾は途中大阪へ立ち寄つて、二三の同志の許を訪ひ、京都へ入つたのが七月初旬であつた、素より落ち着べき家の用意がしてあると云ふではないから、先づ内藏助の詫住居へ行つた、内藏助は此の時、京都に住つてゐたので、山科へ移つたのは、ズーッと後である。

大高源吾が何故に突如に、毎に暇を乞ふて京都へ立つたかと云ふに、此れは内藏助より、内々で使者が來た、其れが爲めに斯は突如に、赤穂を引き拂つたのであつた。

此の時に同志の中の、一粒選とも云ふべき、吉田忠左衛門、堀部彌兵衛などと云ふ、老人株は江戸にゐた、而して此れ等の老人株の相談相手になるべく爲めに、堀部安兵衛、湖田又之亟、近松勘六、赤垣源藏などの若手連が、

所々に潛んでゐた、而して此等義士の面々は、其れとなく其の後の吉良上野介の擧動を、窺ふてゐたのであつたが、上野介には素より何等のお咎めなきのみか、却つて將軍家より、優待されてゐると云ふ有樣であるから、義士の面々は、愈々以て面白くないなれども、天下の同情は、盡く淺野家に寄せられて、上野介の卑劣を惡み、嘲けらぬ者は殆んどなかつた。

斯のごとく、義士の面々は、一所に團結つてゐては、世の人々より何にか企たゝゐるのではあるまゐかなどゝ云ふ噂さた立てられると、其れが吉良家の耳へ入つて、其れとなく要慎をされるやうなことがあつてはならぬ、のみならず、將軍家の手前、甚だ面白からぬ儀と考え、其れで殊更に四分五裂となつて、或ひは大阪或ひは京都或ひは江戸と云ふ風に、所々に飛び飛びに潛んでゐたのであつた。

吉良家にて、若しや淺野の浪士等が、上野介を敵と狙ふて、不穩の擧動に

及びはせぬかと、疑慎を慰にするを内藏助が憚かるよりは、未だ他に大ぬに恐れてゐたことがある、其れは將軍家の手前なんである、何故かと云ふに、此の時内藏助は斷絶してゐる、お家の再興を切に望んでゐたので、即ち内匠頭の舍弟大學に、家督相續の儀を願ひ出てゐたのである、其故に若し淺野の浪士等が、上野介を敵と狙ひて、トもすれば不穩の擧動に出でんも知れずと云ふやうな、噂が將軍家の耳へ入つた時には、其れが爲めに折角願ひ出てゐる家督相續の一條を、却下されるやうなことになつては、相成らずと斯ふ考へて故意に斯は四分五裂に爲つてゐたのだ。

元來内藏助は、復讐が第一の目的ではない、第一の目的と云ふのは、大學どのに家督相續の儀を仰せ付けて戴き、而して自分等は大學どのを輔佐して、淺野家の繁昌を圖らふと云ふのであつた。

若し何うあつても、大學どのに家督相續を仰せ付られずして、お家が斷絶せば

其の時には是非に及ばず、上野介の首級を頂戴ぬたそふと云ふのである、其れ故に復讐は第二にして、第一はお家の再興と云ふのが その主眼であつた、此の事は義士の面々も、能ふ得心してゐる、乃で大學どのに、家督相續のお許があるや否やと、云ふことゝ、吉良家の容子とを、見張の役目として吉田忠左衛門が江戸に陣取てゐたのだ。

今内藏助が俄かに、大高源吾を京都へ呼び寄せたは、吉田忠左衛門の許へと淺野家の總本家たる藝州侯の許へ、秘密の使者に立てやうと云ふ存じ寄であつたのである、其れで今源吾が來たので、内藏助は大ぬに喜んで、早速我が意中を源吾に傳へ、而して秘と江戸へ出立させた。

其の用向は、如何なることであつたか、無論お家再興の運動と、吉良家の動靜を窺ふ指揮とであつたに相違ない、源吾は七月の下旬に、京都を立つて、江戸に二月ほど滯在し、使者の役目を果して、十月の中旬に、江戸を立ち、歸り

路に伊勢參宮をして、同志の方々の武運を祈り、併せて自分等の希望が滿足に達しまするやうにと、祈願を籠めて京都へ着いたのが、十一月の初であつた。

其れより源吾は内藏助の許を離れて、京は祇園の片邊りに一家を構え、大高子葉と云ふ表札を掲げて、俳諧師と爲り、茶人を相手に風流三昧に、其の日を送つてゐた、子葉と云ふは源吾の俳名……即ち雅號である。

○重阿彌寮の秘密會議

モツ大學どのに、家督相續の儀御聽許相成つたと云ふ、お達しがあるかと、内藏助は一日千秋の思にて待つてゐる、中に早くも其の年即ち元祿十四年は暮れて、鶯の初音聞く、十五年の二月初旬となつた、なれども何んの音信もなく、大學どのは矢張藝州侯の、江戸屋敷に謹愼のまゝにて、將軍家よりは何等のお指揮もないのである。

内藏助が吉田忠左衛門や、堀部彌兵衛、さては堀部安兵衛、潮田又之丞などの面々を、江戸に置て、其れとなく吉良家の容子を探らせてゐる、其れと同じく吉良家にても、赤穗の浪士が如何なる企畫を爲し居るやも知れず、要愼に如はなしとあつて、先づ内藏助の容子を、探らせべく爲めに、心利きたる家臣を變裝させて、京都へ入り込ませ、而して其れとなふ内藏助の動靜を探らせ初めたのであつた。

志慮萬人に秀で、才智千人に勝れてゐると云ふ、内藏助、この位ゐのことを知らでなるべき、ツーム……吉良家にても、我々の動靜に心をつけ出したな、この上は十分に油斷をさずべき手段を、講ぜればならぬと考へてゐる中に、世は早や花の三月、人狂ゐ鳥歌ふ、艶陽百花爛熳の節となつた、左れば都に住ふ人々は、老も若きも狂ゐ興じつ遊び廻つてゐる。

内藏助も春の時候に浮れて、花見んとてか、丁度この時に大阪の浪宅より來合

せてゐた、原惣右衛門と小野寺十内と、而して大高源吾の三人を伴れて、圓山の花に浮れ、一酌傾けやうかと、重阿彌の察に立ち寄り、附近の酒樓より酒肴を取り寄せて、四人は花の清宴を催ふした。

我れ一杯彼れ一杯、盃は彼方此方へ飛び交ふて、一同がホンノリと醉ひたる時に、内藏助は其の席に侍べつてゐた、酒樓より來たれる女中に向ひ。

『其方はモウ歸つても可い、用ある時には呼びに遣はすほどに、とばかりにては、合點もゆかれまゐが、實は此れより俳諧をいたして、夕方まで遊ばふと思ふじや、俳諧の席に其方がゐたればとて、面白いことはあるまゐ、殊に老人ばかり、其方の氣に入るは此處に居らるゝ、俳諧師子葉宗匠ばかりじやから、アハヽヽヽ……何には兎もあれ、暫らく歸つて休息いたし居りやと云はれる、此れ内藏助が、女中を遠ざけんとの考へである。

『オホヽヽヽ……左樣なれば、休息させて戴きまする、御用がおありあそばされましたら、お呼び寄せのほどをと云ふて女中は退く。

女中の立ち去るを見送つて、内藏助は聲を潜め、實は方々と少しく御相談いたし度きことの御座るに依り、花に事寄せ、此れまで御足勞を願ふたので御座る左れば方々には近ふお進み下され。

『オヽ左樣で御座りましたか、然らば御免蒙むつて、一團となるで御座らふと、小野寺十内が云ふて、膳部を片脇へ直す、原惣右衛門も大高源吾も、亦た膳部を片脇へ押しやりて、而して四人は相撲の四本柱の如く構へた。

『方々も溝々御承知で御座らふが、正月の中旬より、吉良家の穩密が當地へ入り込み、樣々に變裝いたして、拙者が住居へ參り申すじや、左れば吉良家にても、強う我々を怖れてゐると相見へまする、ところで方々は何んと思召すかは存ぜれども、今日に至るも、大學どのゝお身の御仕末が未だつき申さぬ、斯の如く遷延いたすは、察するところ、九分まで御相續の儀、相叶はぬことゝ存じ

られまするじや、因て最後の手段は、何うでも執られば相成らぬかと思はれ申す、其れ故に此の際、吉良家の穩密に、十分油斷させて、赤穗の浪士には復讐などゝ云ふ念慮は毛頭御座らぬと云ふ、報告を吉良家へさせ、上野介を始め御親戚なる上杉家へも、安心いたさせるが何によりの上分別かと存ぜられ申すが、方々は何んとお考えで御座るかなと、内藏助は先づ口を開く、ウーム、如何にもと打ち點ひて原ば。

『左樣で御座る、今日まで大學どのゝお身の御仕末に付き、將軍家より何等の御沙汰も御座りませぬと云ふは、察するところ九分まで、御家督相續の儀お聽き入れ相成らぬものと存ぜられまする、就きましては只今、貴所の仰せられまする通り、最後い手段を執ることゝ、決定いたし置かれは相成りませぬ、其れゆへに仇家に油斷をさすることが、此の際何によりか肝要の儀に御座りまする吉良家は兎も角も、其本家たる上杉家の安心を求むるやうにいたすが、何によりか大切なることに御座りますると云ふ。

『右に付き拙者は、四五日中に京都を引き拂ふて、山科へ移る積で、横川勘平と武林唯七とに賴みて、家を求めさせ、而して移轉の仕度をもいたさせて置ひて御座るじや、而して身許は、吉良家の穩密に、十分油斷をさする手段を執る積りで御座るほどに、方々も其のお積にて御油斷なきやうお心掛のほど願ひとう存ずる。

『心得て御座りましたと、三人は打ち點く、すると内藏助は源吾どのと言葉を改ためる、ハイと大高源吾は、内藏助の顏を見上る。

『お身に篤に御注意いたして置きたいことが御座るじや、其は他でもなけれど拙者が山科へ引き移らば、殊に依たら、一時は穩密どもが、一層拙者の動靜を探索いたすに相違ない、其は云ふまでもなく、拙者が穩密の目を避けて、片田舍へ移り、除ろに何にか企てはせぬかと思ひてな……拙者は斯く思はしめん

が爲めに、殊更に山科へ移り、而して反間苦肉の計略を廻らさんと考へてゐるじや、乃で拙者の考ふるに、穩密共がお身の許へ密子を探りに參りはせぬかと、思はれると云ふのは、お身は俳諧を業として居られる、其れゆへに風流の道を以て近寄り、シテ其れとなふ、密子を探らんも圖られぬ、左ればお身のことゆへ、萬々お脱りはあるまじけれど、御參考までに、拙者が申し聞けて置く、因て夢お脱りなきやうに願ひたい。

『心得て御座りまする』と、此に大體の相談が終つたので、其れより大高源吾は酒樓へ行つて、女中を呼んで來た、而して更に四人は、夕方まで酒を飲んで別れたが、この相談は四人の外、同士の中にて知る者は更に無く、又た誰にも語らぬやうにとの、約束を堅めて置ひたのであつた。

原惣右衛門は、其れより二三日都の春景色に醉ふて、其のまゝ大阪の浪宅へ引き返した、内藏助は間もなく、山科の里へ引き移つたが、其れより内藏助は

祇園の遊里へ足を入れて、終に山科大盡と云ふ名を、遊里に轟かせ、剩さへおかるゝと呼べる美人を、山科の里より選り抜きて妾と爲し、石が變じて綿となると云ふ、大亂心の狂言を演き初めた。

是れ云ふまでもなく、敵の間者に十分の油斷を與ふべき、内藏助が心ならずも、殊更に狂ひ出だせる計略なんであつた、なれども内藏助の心底を知らざる、横川勘平や、武林唯七などは、内藏助と一所に山科の里に住つてゐたから、日々此の亂行を見て、大く嘆き、如何なる惡魔が御家老に魅つたかと、大く心を碎きて、早く覺よかしと祈つてゐた、内藏助は唯七等の氣をくさらせてゐるのを、能く知つてゐる、けれども何事をも語らざるのみか、敵の間者に油斷を與ふる、反間苦肉の計略なりとは、色にもホノめかさず、而して其の亂行は日と共に愈々烈しく爲つて來る、左れば都の人々は、内藏助のことを惡ざまに云ひ初めた、唯七等は世間で内藏助のことを惡ざまに云ふのを聞い

て、モツ堪まらず、思ひ切つて一二度内藏助に意見をしたことがあつたが、石地蹴の頭を眞綿で叩ひたほどにも感じがなく、はては祇園の小倉太夫と云ふのを、大金を投じて身受けした。

斯の如く打ち續く内藏助の亂行が、殆んど其の極に達したので、江戸より入り込んでゐた穩密どもゝ、餘りの放蕩に愛想をつかして、此の分なればモツ大丈夫と稍や安堵した。

此の時に圓山は重阿彌の寮にて、内藏助が源吾に云ひ聞かせた通り、源吾が俳諧を業としてゐるので、一つ源吾の許へ入り込んでみやうと、斯ふ思つて、穩密の一人が俳諧師に化けて、屢次出入する、源吾はおゐでたなと悟つたが、何處までも左あらぬ體にて、交際ふてゐたが、併しこの事は秘と山科へ通知をして、置ひたのであつた。

内藏助は穩密どもゝ、モツ十分に安堵いたしたらしい容子である、併れども油斷

大敵の感念は、寸時も内藏助の腦底を離れない、其れかあらぬか、或日のこと源吾の住居へ、祇園の一力より内藏助の使者として、一人の女中が文箱を携つてやつて來た。

源吾が其れを受け取つて讀んでみると、お身の許へ俳諧師に化けて、入り込んで來てゐる、穩密は幾日頃又た來るか、其の日と其の時刻が明つてゐれば、知らせて呉れ、若し其れが明らなんだら、三四日は一力にゐるゆえ、來た時に秘と知らせて呉れぬかと云ふ、意味が認めてあつたのである。

源吾は内藏助の意中を知らぬなれど、反間苦肉の計略を廻らされるのであらふと思つたところが、丁度幸ひ、其の穩密が明日の巳の刻頃に來て、一所に午の仕度に一酌催ふそふと云ふ約束が、其の前日に出來てゐたので、其の事を返事に認めて女中に渡した。

其の翌日の巳の刻頃に、果して其の穩密は行つて來た、而も一升徳利に重の物

さへ添へて携つて來た。

乃で源吾は庭に向ひし坐敷に陣取で、其の重の物を肴に、彼が携て來た酒を燗して、チビリ……チビリ……と飲み初めつゝ、世間話をしてゐる、折から御免あそばされてと、優しき女の聲が揚口にする。

○内藏助、太夫を伴れて源吾の許を訪ふ

大高源吾は勝手廻の小用と、朝夕の掃事を爲させべく爲めに、一人の老婆を召し使ふてゐたところが、今俳諧師に化けし穩密が、酒と肴とを携つて行つて來たので、其ればかりを食つ、飲むと云ふ譯にもゆかぬので、其の老婆に云いつけて、一寸とした肴を調へさせに行つた。

其の留守に御免あそばされませやと云ふ、優しゆうして而も艶々しき女の訪ふ聲が、揚口にする、素より廣からぬ源吾の住居なれば、其の聲が坐敷へ能く

響き渡るのである。

『子爵どの何誰か、お越しなされたやうでは御座りませぬかな、優しい女の聲が、入り口で聞こえまするがと穩密は云ふ。

『如何にも……が、併し拙者の許へ、女などの尋れて參る筈は御座らぬが……兎も角も出て見ませうと云ふて、揚口へ出て見ると、此は如何に内藏助が、此の頃大金を出して、身受をしたと云ふ、小倉太夫を伴れ、一力の女中を供とし、小野寺十内をも一所で、尋れて來たのであつた。

此の容子を見て源吾は、前日の手紙の約束があることゆへ、さては御家老、穩密に何にか又た計略を廻らせられるのであるなと、斯ぶ考えたから、ヤア此れは山科のお大盡、御寵愛の太夫を召し伴れられて、能ふこそお越し下されたサア何うぞ此處へ、お通り下さりませと、故意穩密に聞えよがしに大きな聲にて云ふ。

『子葉どの、然らば兎も角も一と休息いたさせて貰ほふか、小野寺姓にも、マア上らつしやれいな、太夫其方も揚りやと、内藏助は小倉太夫に手を引かれながら、ホロ酔ゐ機嫌の千鳥足にて、坐敷へ通る。

此の容子を見て驚ひたのは、その穩密である、アヽ又た茶屋酒に浸たりてゐたと相見ゆるな、其れにしても太夫を伴れて行つて來るとは、驚ひた、此の容子では、モツ彼れ是れと疑ふまでもない、全然色と酒とに心を奪はれて了ふたなと、斯く思ひながらも左あらぬ體にて席を讓るい

内藏助は、小野寺十内と共に、其處へドツカと坐りながら、穩密の顏をジロリと眺めて。

『子葉どの、此の御仁は矢張風流のお友達でかな、と事もなげに訊れる、源吾は靜かに點いて、左樣じ御座りまする、嵯峨野の邊りに住はるゝ御仁で、先頃より風流友達と爲りまして、互ひに御親意に願ふて居りまする間柄じ御座りまするとも、又た事もなげに云ふて退ける。

『オヽ左樣で御座つたか、其れは其れは、お身拙者を御存じあるか無いかは兎も角も、拙者は山科大盡とか、又たうき大盡とかと云はれて、祇園の花に持て囃されて居る白痴で御座りまするじや、アハヽヽヽ……以後お見知り置き下されひ、拙者も俳諧は少々詠り申すじや、アハヽヽヽ……と他愛もない挨拶をしながら、頻りと扇子使をしてゐる。

『オヽ……今、廓にて飛ぶ鳥落す全盛の、うき大盡と云はるゝは、お身樣のことで御座りましたか、さても御盛んなことで、お羨やましゆふ存じまする と云ひながらも、彼れは心の中にて呆れ返つてか、眤と内藏助の醉顏と、其の傍に觸り合つて坐つてゐた、小倉太夫の顏とを眺めてゐた。

『子葉どの、御酒宴の最中とみえまするな、拙者にも一ト口振舞ふて下さらぬか、御催促申すやうで、甚だ失禮では御座れど、見れば飲みとうてならぬ酒

アハヽヽ……と何處までも他愛ない。

『左樣なれば飲みかけにて、甚だ失禮では御座れど、お茶の代りにと、源吾は云いつゝ、我が前に在つた朱塗の盃を、盃洗の水に潜らせつゝ、内藏助に差すのである。

太夫酌して吳りやと、身體をくの字形にして、小倉太夫に酌をさせながら、グーと一呼吸に飲み干して、イヤ甘露々々……ゲープ……

『お身も一杯召し上られては如何に、一杯戴くも、二杯頂戴なすも道理は一つ、アハヽヽ……先づ先づ……と其の盃を小野寺十内に差す。

『時に予輩どの、身許今日小野寺姓同道にて、太夫をも召し伴れ、斯く推參つかまつつたは、東山の青葉を觀がてら、小陰の涼しき處にて、一酌催ふそふと存じてな、實はお誘ひに參つたので御座るじや、と許にては突然のことゝて、御合點もまゐるまゐが、實は身許も突然に思ひついたので、と云ふのは

昨夜より、一力で小野寺姓と飲み明したが、幾時までも茶屋の二階で、女どもを相手にいたし、飲んで居つても變化が無ふて興味が御座らぬじや、其れで不圖東山へ出掛やうと思ふて、女どもに云ひつけ、好き場處に仕度をいたさせて置き申したじや、左れば此れより身許と一所におじやれ、お身の好きな太夫も呼び寄せて置いたから、アハヽヽ……と子供にも劣りし内藏助の言葉が、終るか終らぬかに小野寺十内が。

『うき大盡が折角のお勸めだ、身許もお供いたすのじやに依つて、其方は早ふ仕度をして御座れ、此の年に爲つても茶屋酒は又た格別、若い女にチヤホヤ云はるゝは、決して氣持の惡ひものでは御座らぬじや、アハヽヽ……と小野寺の老人までが、愚にもつかぬことを竝べたてゝゐる。

『有がとう存じまする、夢に牡丹餅とは此れ等のことを申すので御座りませうが、殊に私の馴染んで居りまする太夫までをも、お呼び寄せ置き下さりました

とは、斯樣な嬉しいことは御座りませぬと、源吾は大變に喜んで、左樣なれば早速仕度をいたして、お供いたすで御座りませう。

然らば早う仕度をしやれと、内藏助は云ふたが、何にやら急に氣のついたやうな風情にて、オヽお身に許り行きや行かうと勸めたが、此處にお客さんが、御座つたに、ツイ醉ふた調子に浮れて、忘れて了ひ、アハヽヽ……お身へとんだ失禮をいたし申したと、云ふて其の穩密の顏を眺めつゝ。

『此れも酒ゆへ、拙者の本心からでは御座らぬに依つて、先づ先づお許し下されひ、アハヽヽ……其れは左樣として、失禮ながらお身も御一所に御座らぬか、此處にて酒召さるゝよりは、青葉の小蔭にて、女を相手に一酌傾むけらるゝ方が興が深ふ御座るぞ、左れば御同道めされと云ふて勸むれば、傍より大高源吾も、亦た。

『うき大盡が折角此の樣に云ふて、お勸め下さるので御座れば、お身も御同道いたされひな、と云ふて勸めるので、其の穩密は然にば、甚だあつかましゆふは御座れど、折角のお勸め、殊に拙者とても酒は好物、加ふるに女があると御座つては、此りやお供せいでは叶びませぬ、アハヽヽ……左樣なれば、御同伴お許しなされて下さりませと賴む。

『サア〈……御遠慮には及ばぬこと、一人にても人數の多い方が興が深ふ御座るじや、斯うお話が定まれば、子葉どの、早ふ御仕度をいたされひと、小野寺老人は急き立てる、子葉は其の中に身仕度をして、此に四人は小倉太夫と女中とを伴れて、照りつけられるやうな夏の炎天を、伊達編笠に防ぎつゝ、東山へと出掛て行く。

○青葉茂る東山の豪遊

綠濃かに生ひ茂れる若葉の小蔭、殊更に風通しのよき場處を選らびて、一力

の仲居五六人が、前え出るやうな緋の毛氈を、七八枚敷ひたからして、緋と綠との對照よき、艶麗なる十二疊敷ほどのお座敷は、東山の奥に出來上がつた、その毛氈の上には、白絹の夏座布團が、十枚ほど並べられてあつて、煙草盆までが行儀よく置かれてある。

而して片脇には、料理を入れたる籠に、酒、さては燗を爲すべき、凡ての道具が悉く用意されてあつて、今は内藏助の來るのを待つのみである。

内藏助の來るまで、一ト休みいたして置かふと思ふてか、六七人の仲居は毛氈の片脇に一團と爲つて、何にやらむ、ヒソ〳〵と物語をしてゐる。

ところへ東山の夏景色に、浩然の氣を養ふての戻りなるか、羽織袴に兩刀を落し差しにせし一人の武家が、編笠を片手に待ち、扇子使ひをしながら、ブラ〳〵と此處へ行つて來て、通りがかりに此の有樣を見ゐ、其の仕度の立派さに驚き、何方かの大名が、都へ上つて忍びの遊びか、其れとも又た公卿方が、

祇園ひ花に浮れての醉興かと、斯ふフト考えたので、ズカ〳〵と一團に爲つてゐる、女中の傍へ進み寄りて。

『少しく物を訊ねるがと、嚴かなる言葉に、女中一同は驚ろひたが、其の中で年嵩の一人が其れへ進み出て、何にか御用に御座りまするか。

『見ぬ參らするに、其方達は一力の女中のやうに存ずる、さても美事なる此の場の仕度じやが、何方かの大名が、微びの御遊興にてもいたさるゝのかな、餘計なこと訊ねるやうなれども、餘りの立派さゆえアハ、、、、……何んな用事かと思ふたら、此の美事な仕度の詮議、阿房らしやと思ふたが、相手は武家、ツンと澄す譯にもゆかぬからして。

『今日うき大盡さまが、東山の青葉を眺められんとてのお酒宴で御座んすわいなア、モウ程なふお越と、妾どもはお待ち申して居りまするので御座んすわいなア、馬鹿にしたやうな、自慢のやうな挨拶をする。

『うき大盡様……ウーム、さては祇園の里で、今、飛ぶ鳥を落す全盛の、豪遊を極めてゐる、山科の大石姓がお遊びか。

『ハイ左様で御座んす、一力の二階では暑くるしゆふて而白ふないに依つて、東山へ行かふとの仰せ、其れで斯様に仕度をいたして、お越をお待ち申して居りまするので御座んすわいなア。

『ホヽ……左様か、さてもお盛んなこと、拙者は又た何方かの御大名が、微びのお遊びかと思ふて居つた、アハヽヽ……此れは餘計なことに、手隙を費させ、氣の毒であつたのうと、言葉重た氣に云ひ棄て、其のまゝ手にせる編笠を被り、扇子使をしながら、靜々と立ち去つたのであつた。

其の武家の姿が、清水の方に消えたと思ふころ、内藏助は小倉太夫に手を引かれ、老人の小野寺十内は、女中に手を引かれ、而して大高源吾と、其の穩密とを伴れて行つて來た。

一團に爲つてゐた女中は、其れと見るより、うき様が御座つた、うき様がと口々に云ふて、總立と爲り、持つて來てゐた伊達の日傘を、走つて行つてさしかけ、お待ち申して居りました、サア早う御座んせいなと、周圍より内藏助等を取り圍みて、其の毛氈の上へ伴れて行く。

『ホヽ大層美しゆふ、仕度をいたして置ひて臭れたな、此處は十分の木陰で而も強う風通しが可さそうじや、子葉どの斯様なところで、女を相手に飲み申すと、十分に飲めまするぞや……イヤ十分どころでは御座らぬ、酔ひつぶれるまで行けまするぞや、アハヽヽ……サア打ち寛ぎられひと云ふて、内藏助は正面の座布團の上に、ドッカと大胡座をかく、其の傍には小倉太夫が控えてゐる、其れより向ひ合ふて、大高源吾に小野寺十内が控へる、シテ源吾の隣には、其の穩密が陣取てゐた。

間もなく用意の料理は運ばれる、酒の燗は出來る、而して持つて來てゐた、三

味線を仲居に彈き初じめた。

萬事萬端飲めるやうに仕掛が出來てゐる、ところへ持つて來て、此の四人とも酒は隨分にゆける方であるから、半刻ほどの中に、二升餘りの酒は、四人の腹と女中どもの腹へ入り、五臟六腑へ滲み渡つたからして、何れも陶然と醉ふて來た、大高源吾は扇子で小膝を叩きながら、今廓で盛に流行てゐると云ふ歌を、天性の美音にて、節面白く唄ひ初めた。

時しも先刻、女中に此の美くしき仕度は、誰の遊興かと訊れた彼の武家が、何んと考へてか、又た此處へ行つて來た。

敏くも其の姿を認めた一人の仲居は、傍にゐた仲居に向ひ、一寸と驚さま、彼れ御覽じませ、先刻のいやらしいお武家が、又た來やはりましたぞえと云へは、お驚と呼ばれし其の仲居が、振り返つて見て。

『オヽ……ホンニ……嫌らしい、又た來やしやんしたと、獨語のやうに云ふ

を、其の前にゐた源吾が聞きて、何んじや嫌らしい武家が又た來たとはと云ふて訊ねば、その仲居は向ふの方より、此方を指して扇子を使ひながら、靜々と行つて來る、其の武家を指さしつゝ、在りし容子を委しゆふ漸語つて聞かせると、何んじや變つたことにてもあつたのかと思ふたら、つまらぬこと、アハヽヽヽ……其のまゝ又たもや扇子にて、手拍子を打ちつゝ、流行歌の續を唄ふのであつた、內藏助や小野寺十內も、勿論こんな事を知らふ筈がないから小倉太夫や氣に入りの仲居等を相手にして、殆んど夢我夢中で、打ち興じてゐたのであるし

其の中に其の武家は、この狂氣じみたる酒宴の傍へ行つて來て、暑氣を凌ぐなる深編笠に面體をかくしつゝ、片脇なる古木の蔭に彳みて、內藏助等が狂ね興ずる、その容子をば、呢と眺めてゐたのであつた。

云ふこと、爲すことは素より、本氣の沙汰にあらぬ內藏助の狂態なれども、本

心は鐵石も啻ならず、毫も狂ふてはゐぬから早くも武家の イすめる姿をチラリと認めたが、左あらぬ體にて。

『蔦はゐぬか、蔦…蔦と呼ぶ源吾の傍にゐた仲居頭のお蔦は、ハイ此處に居りまするとと云ふて立ち上り、そのまゝ内藏助の傍へ來る。

『うきさま、何にか御用で……と、得も云はれざる愛らしき笑を、うき大盡の顏にあびせかけゐ、内藏助をうきうき大盡……うき様と呼ぶは、蓋し内藏助の俳號を、うきと云ふので、其れで斯はその雅號を呼んで云ふのである。

『子葉どのは、お年も若く男振も強う善く、殊に音聲も麗はしければ、女が好じや、拙者等はモウ老年……なれど、マア暫らく相手に爲つて呉りやれ、何にか一つ唄ほふかい、アハヽヽヽ

『ハイ……うきさま、妾は若ひ殿子が大の好き、其れで子葉様に歌を唄ふて貰ふたので御座んすわいなア、オホヽヽヽ……サアお唄ひあそばせ、彈せて貰ふ

で御座りませうわいなア……と、打ち興じながら、お蔦は三味線を引き寄せる而して靜かに調子を合すのであつた。

『オヽ蔦の三味じ、一つ端歌なと唄ほふか、太夫先づ呼吸つきに、一つ酌をいたして呉りやと、盃を持つと、小倉太夫が其の盃に半分ほど酒を注だ 内藏助はその盃を口許まで持つて來かゝつたが、俄かに氣のついたやうな風情にて、ジロリと盃の中を眺めながら。

『アハヽヽヽ……盃が輕ひと思ふたら、酒が半分より入つてゐぬ、太夫銚子に酒が無いのかと、ジロリッと眺むる内藏助の顏を、太夫は秋波に、優しゆう見やりながら。

『お酒は澤山御座んす、なれどうきさまえ、貴方は昨日から飲みつゞけ、澤山お酒がお腹に入つてゐやるほどに、左様左様飲し上つてはお身の毒、それゆえ……はてサア妾の云ふこと、聽きやしやんせいなア……

『アハヽヽ……俺のことを案じて呉れるは、我が身ばかりじや、はてさて可愛い太夫……其んなら我が身の意見に從ふて、少しつゝ嘗めやうかいなア……お蔦……彈ねて呉りやれよと云ひながら、扇子取り上げ。

『心で留めて歸す夜は、可愛お方の爲めにもなろと……

内藏助は端歌を唄ひ出す、お蔦は冴えし撥音に、根〆も高き二上りの無情の草も木も爲めに、浮れ出さんかと思はるる許りなり。

先の程より深編笠に面體を匿し、古木の樹陰に身を潜めて、此の狂態亂狀を眺と眺めてゐた彼の武家は、何にやらむ頻りと思案に暮れてゐたが、内藏助の今その俗曲を唄ひ終りて、女どもがキヤツ……キヤツと褒め立てゝゐる處へ、其の武家は靜々と歩み寄つて來た、源吾はその容子を見て、さても訝かしきことゝ思ふてゐたが、左あらぬ體じ、仲居を相手に打ち興じてゐる、すると十七八に爲る、一座中での最上の花とも云ふべき美しの仲居が、水をと所望

さる小野寺十内の言葉に、立ち上つて其の席の後の方に、運んで置ひた水桶の水を汲まんとせるところへ、其の武家はズカズカと進み寄つて來たので、仲居は驚き、逃げ行かんとするを、アイヤ何にも其のやうに、驚きやるるには及ばぬ、うき大盡どのに、少しく取次の乞ひたいのじやから、先づ先づ沈着て呉りやれと優しゆふ云ふ。

デ、仲居は仕方がないから、何のやうなことで御座んすそへと云ふ、アノ薩摩の藩士じやが、少しくうき大盡にお目通りいたして、申し上げたき事があると斯樣に申して居ると、其方取次をいたして呉りやれぬか。

嫌と云ふ譯にはゆかないから、畏まりまして御座りまする、左樣に申し上るで御座りませうなれど、御武家樣、うき樣は昨日より飲みつゞけで御座んすほどに、お會あそばされまするやら……と、云ふた、皆なまで聞かずに、

『島津家の藩士が、是非に申し入れたきことあると、申して居ると云ふて呉り

やれ、左れば如何ほど御酒飲し上つて居られやうとも、御本心は確かならむ、必らず御面會下されやうほどにと云ふて。其處に立てゐる。

仲居は十内に水を渡して、而して此の由を内藏助に、改めて云ふ、すると内藏助は、ナニ島津家の藩士が、身許に是非に申し聞けたきことあるに依り、面會ないたしたいとな、ハテ心得ぬこと、身許島津家の御藩士に、御懇意の方はないが、さても合點のゆかぬことゝ、小首を傾むけると、大高源吾が、如何なる用向で御座るか、拙者彼處へ參つて、訊れてみるで御座りませうか。されば、のう、と云ふたが内藏助は、イヤ其れには及ばぬ、身許と知つて、是非に申し聞けたきことありと云やるからは、何にか大切なる御用が、おありなさるに相違あるまいから、然らば差支えぬ、是れへお案内申して呉れひ、御面會ないたすであらふと云はれる。

すると今も昔も茶屋女の人情……茶屋妓氣質には、變りはないとみえて、

仲居頭のお鳶が、いき樣お會ひあそばしますな、彼のやうな嫌らしい御武家は御座りませぬ、大方此處で、この樣に强う面白ふ、飲めや唄へと騒いて居りまするので、其れが淡やましゆふ爲つて、お流れなと一口戴かふと、其れで彼のやふなこと、云やしやんすので御座りませうほどにと、云ふて、打ち棄て置かれと勧つるのである。

『アハヽヽヽ……イヤ左樣ではあるまゐ、何にか御用がおありなさるのであらふ、假し又たお前の云やる通りならば、如何ほどなりと、御酒振舞ふわい、この席に男は四人、女は八人、左ればモウ一人や二人男が混らぬと、得て女に引を取りそうじや、アハヽヽヽ……大事ない、此れへ御案内申しや……アヽ此れおつや、早うお伴れ申して來やと、内藏助の言葉、おつやと云ふは、其の十七八の盛の花である。

鶴の一聲拒みもならず、畏まりまして御座りまするとおつやは立つて其の武

家の傍へ行き、お言葉の御容子申し上げましたれば、如何やうなる御用のおありあそばすかは存せねども、うき大盡と知つて會いたいと、仰せらるるからは御用の十分におありなさるに相違あるまじほどに御案内申して來やと、斯樣に仰せられて御座りましたに依り、お越しあそばされませと、今度は内藏助の注意があつてか、最も叮嚀に云ふ。

『オヽ左樣で御座つたか、其れでは、いうき大盡には、拙者にお會い下さるとて御座るか、ウーム……さては未だ本心まで、イヤナニ本當に孽けなふ御座る、然らば御案内下されひと云ふて、被つてゐた深編笠を脱ひで、片手に持ち、作法なれば衣紋を繕ろひ、髮の後れ毛を撫で上げて、そのおつやの後より靜々と尾いて行く、涼しき風は、バサバサと若葉を拂ふてゐるなれども、四方は芝と若草とにて敷き詰められてあるから、塵などは蹤にしたくも立たず、其の涼しさ、其の心地よさ、樂園に遊ぶとか、仙境に酌むとか、云ふ語があるが、實にや斯のごときことを云ふたのであらうか。

○時ならぬ花吹雪

サア何うぞ、此方へと亦た作法なれば、大高源吾は毛氈の緣まで迎へに出る然らば御同席お許し下されと、武家は叮嚀に會釋して、内藏助と相對し、席の中央に坐を占める。

見れば年配五十六七と覺へしき、智勇兼備の相ある天晴の武家であるから内藏助は何にやらむ點きつゝ、醉ひくづれてゐた身體を、覺束なさそふに坐り直して、兩手をユラ〳〵と膝に突きながら。

『身許がうきで御座る、女の口上に依れば、お身樣は島津家の御藩士にて、ゐらせらるるとかや、御覽の通りの大白痴で御座れど、以後お見知り置きのほどお願ひ申す、ゲーブ……と内藏助は初對面の挨拶を、何うやら斯うやら述べ

た、その容子を眄と眺めながら、顔を顰めたが左あらぬ體で。

『大石内藏助良雄殿と云ふ、御高名は豫々承はつて、折あらば一應お目通りいたしたいと、斯樣に存じて居り申した、拙者は島津家の藩士、姓名は仔細あつて申し述べませれど、字ゐ喜劍と申す武骨者に御座りまする、御迷惑なから以後、お見知り置きのほど、願はしゆふ存じ申す。

『オヽ……左樣で御座るか、シテお國表より都御見物にでもお上りなされたので御座つたかな、都の若葉は又た格別で御座るに依つてなと、云ふ内藏助の言葉を打ち消して。

『イヤ中々以て、其の樣な優長な身では御座りませぬ、が、併し突然斯樣な處に、姿を現はしましたに依り、其のお招召は御尤も、身許實は三四年前より、江戸のお屋敷にお勤め申し居りましたるところ、此の度國詰と相成りましたに依り、歸國の途次、都見物をいたし居りまする儀に御座りまするとと、

先づ叮嚀に其の仔細を物語るのであつた。

『オヽ左樣でか、其れは其れは、飲み荒しにて失禮で御座れど、先づ一ト口召し上れ、是りゃ蔦、お盃を差し上げぬかと云ふな、皆まで聞かず、喜劍は一膝前へくり出でゝ。

『内藏助殿、拙者お盃を頂戴に、お日通り願ふたのでは御座りませぬ、少しくお身にお訊れ申し上げ度儀の御座つて……

『イヤ……デ、御座らふなれど、話は話し、酒は酒、アハヽヽヽ……まアさ、其の樣な野暮なことは仰せられずに、一口召し上がれ、殊更に取り寄せると云ふではなし、有合せなれども酒は劍菱……名產伊丹の香は、又た格別に御座りまするぞえ、アハヽヽヽ……薩州の御藩の方は、お國風だけあつて、强う物堅ひ、先づ先づと云つて、我が前に在る盃の餘滴を切つて、差し出せば、喜劍は苦々しき事に思ひながらも據處なく其の盃を受ける、其れと内藏助の目

配に依りて、お蔦は酌をしやうとする。

『お盃は頂戴いたし申したが、拙者酒は性得の無調法、お酌ぎ下されたればとて、徒に醜態を溜るのみで御座れば、お扣へ下されと云つて、お蔦の顔を睨むやうに眺める、お蔦は其の怖ろしい顔を見て怖氣を生じ、其のまゝ銚子を下に置ひて呆れてゐる。

『お嫌ひとな、さてさて此の様な味のよき物を……然らば酒の代りに、すもじなりと云へば、イヤモウ御心配下さるな、何にも頂戴の儀は、御免を蒙むる、時に大石殿、身許お身に少しくお訊れ申し上げたき事の御座るのじや、左れば勝手ながら、暫らくの間、御酒お控えの儀願いとう存じ申す。

『左様でか、シテお訊れとは、如何なる儀に御座りまするかな、兎も角もお伺ひいたすで御座らふなれども、強う辺み入りたる、面倒なる儀に御座らば、只今は御覧の通り、飲みつゞけにて、聊か精神が狂い居り申せば、若し失禮のあつては恐縮に存ずるじや、アハヽヽヽ……なれど、失禮の儀お許し下さらば何になりとお訊れ下され、ゲープ……

喜剣は、グヒッと内藏助の前へ進み寄つて、居住居を正し、暫らく呢と其の醉顔狂態を眺めてゐたが、如何しけむ、ハラハラと落涙したのであつた、ハテ異なことゝ、内藏助は思ふたが、左あらぬ体で澄してゐる。

『別儀にても御座らぬが、お身は浅野家代々の御家老、殊に至誠純忠にして志慮深く、寛仁大度にして智勇兼備の御方とは、世間の噂さのみでは御座らぬ拙者が家中の重役方より、云ひ聞かされ、シテ昨年殿中の大騒動ありたる節、重役方の云はるるには、見てゐられひ、今に赤穂の城代大石内藏助良雄殿は、必らず目覺しいことをなさるに依りと、斯様に仰せられて御座つた其れで身許は成ろほど、噂さに聞ゐてゐる大石どの、事なれば、是りや重役方の云はるる通り、必らず目覺しい働きを、あそばすであらふと存じ、其の後實

は、一日千秋の思ひにて、今日や何事かあるか、明日や心地のよいお話を承まはるかと、其れを樂みにいたし居つたる甲斐もなふ、早や一歳の餘を過ずも何んの音沙汰なし、如何がいたされたる儀かと、思ひは拙者のみならず、心ある他藩の方々も、皆な同じで御座つた、この事は都近くに住ぬ居らるる、お身の耳へは餘も入いるまじ、なれども江戸にては大評判で御座つたじや、然るに先頃より大石と云ふ男は、見掛に依らぬ意氣地なし、イヤナニ君恩を沒却いたす、不忠者じや、大白痴じや、武士の風上に置けぬ、果れ果たる人物じや聞けば華酒な都の風俗に染み、近頃は主家の斷絶も、亡君の御無念も打ち忘れて、祇園の酒に心を醉わせ、島原の花に魂を奪はれて、殆んど有頂天と、イヤハヤ一人として、お身のことを惡さまに、云ひ罵しらぬものは御座らぬじや、拙者もはてさて情なきことではあると、武士は相身互ひ、主君は違えど忠義の心には、二つは御座らぬに依り、お身の事を強う嘆き申し居りたる折りも

折り、國元詰と爲つて、お暇を戴きたるに依り、丁度幸ひ、都を過ればその折に、篤とお身の容子を探り、果して江戸で取り沙汰いたす通りの、不行跡で御座つたらば、無理からも面會して、篤と御意見申し上げやうと、斯樣に存じて四五日前に都へ參つて、其れとなふ容子を探れば、イヤハヤ聞きしに優る大亂痴戯、一度は強う呆れ果て申したが、併し如何なる聖人君子と雖ども過は必らずある、過まつて改むるこそ、聖人なり君子なり、又た人の過を知つて、其れを諫めざるは、不德の至りなりと、斯樣に思ひ直して、山科の里をお訪れいたさんと、先程此處を通りたるに、最も立派なる此の御仕度に、さても贅澤な、何方かのお大名な、お微行の御遊興かと、餘計な詮議だてのやうなれども、不圖心に思ひ浮びしまゝ、此れなる女中に訊れてみれば、うき大盡が、茶屋酒に飽きての御遊興と聞き、うき大盡とは廓で今持てはやさるる、大石どの、又の名じやが、ウーム……其れでは内藏助どのが、此れにて遊ばれる

……此の儀に付いては、別段に拙者、存じ寄りを、申し述ぶるまでにも及ばぬこと、申さば拙者の金子を、拙者が勝手に、心の向ふ處に棄る儀にて御座れば、な、アハ、、、……尤も拙者の茶屋遊の儀に就いては、先頃より老母が在金の減るのを案じて、度々の意見、又た家内奴は悋氣いたして、屢次の頑意見で御座つたが、此の樣な面白いことは、天上天下又たと御座らぬに依つて頓んと止み申さぬじや、アハ、、、……左れば存じ寄りと申しては、唯だモウ面白らふて堪らぬと申すのみにて、其の他には何んにも御座らぬ、左れば斯ふと改めて、申し上ることも、亦た勿論おわさぬで御座るじや、主人持の時分は、遊びとうても遊ばれず、さてさて役目の手前と云ふものは、氣兼なものじやなと、斯樣に存じて居り申したが、浪人いたしてからは、誰れに遠慮も何んの其の、十日流連いたし居らふとも、又た惚れた太夫を身受いたそふとも、氣兼と云ふては更になく、斯樣な面白ひことは御座らぬじや、召使の下郎奴

のか、左るにては此れより山科へ參つたところが、お留守じや、如ず此れに待つてゐて、面會いたすにはと、其れより清水の邊を一と廻りして、今し此れへ來て見れば、鄙猥がましき此の亂行、場處もあらふに、人の往來するなる東山の綠蔭にて、此れ見よがしの此の狂態は、マ、何に事で御座るか、大石殿……サ、拙者のお訊れ申したいと云ふは、此點のこと、篤くりとお身の存じ寄り、お聞かせ下され、イヤナニ承はるで御座らふわいと、兩手を膝に置き、肩を怒らせ、兩眼に露を漂えて云ひ出でたる喜劍の言葉は、悉く五臟六腑より絞り出だしたる、血の聲の反響であるのである。

此の有樣に、一座は沒興に沒興け渡つて、女共は二人づゝ觸れ合つて、飛び飛びに陣取りつゝ、呆れ返つてゐる、其の有樣、宛然花の筵に嵐の吹ひて來たか、納涼の席に夕立の襲ひ來たれるが如き体であつた。

『如何なるお訊ぬかと思へば、拙者が夜毎……日毎の遊興で御座るか、アハ、

が、時々母や妻の心を案じ煩らふてか、世間で旦那樣のことを、何人の彼の
と申して、强う笑ふて居りまするほどに、些とおたしなみあそばせなそと、意
見がましいことを申しまするじや、なれどお身、笑ふ奴が間違ふて居るのでは
御座らぬかな、人樣に借財をいたして、遊ぶと云ふではなし、我が金を我が
勝手に、散くに、さてもねらざる心遣ひ、アハヽヽヽ……お身、マア左樣で
御座らぬかな、其れは左樣として、只今承はれば、お身は國詰と爲つて、
薩州へ下らるる道すがらとのこと、左れば旅の憂晴しに、拙者と一所にお遊び
召され、アハヽヽヽ……ナニ……お嫌とな、ハテさて堅くるしい、長ひ浮世に
短かい生命、少しにても面白い思ひを、余計にいたし置くと、生命が延び申す
兎角浮世は色と酒、野暮は廓の禁制とかや、サヽお腰の物脱ずされて、打ち寛
ぎられひと、云ひつヽ内藏助は、前なる盃を取り揚げて、大夫酌をいたし
て呉りやと、其の他愛もないこと、宛然ら魂の脱け出でたる空蟬のごとし。

喜劍は、ハラハラと涙を漏しながら、眤と内藏助の顏を眺めてゐたが、一入
怖ろしき頭をなしつヽ、大石殿と、破れ鐘のやうなる聲にて呼ぶ。
『未だ伺にか御用がおありあそばすので御座るかなれど、余りに堅くるしきこ
とは、女どもが强う迷惑をいたしますのじやに因つて、成らふことなら、今江
戸で流行てゐる、面白ひ歌の文句など、お聞かせなされて下されひ、アハヽヽ
ヽ……
『お控へめされ大石殿、拙者は未だお身の如く、亂心はいたし居りませぬ、
武士の血も通ひ居れば、頭に忠義の二字も籠り居り申す。
『ヤレ怖ろしや、左樣で御座つたか、此れは失禮な仕り申した。
喜劍は鐵扇を右の手に持ちて
『内藏助殿、お身は内匠頭殿の御最後の御無念さを、御存じ御座らぬかな、
イヤさ忘却いたされたか、又た主家の斷絶いたせしは、誰れが爲めかと云ふ

ことを、お悟りなきか、淺野家は申し上げやうもなき、御痛はしさの限りで御座るに、其れに反して、其の仇敵とも云ふべき、吉良家は上杉家の御縁引とも、申すでは御座らふけれども、其の後の將軍家のお覺、殊に芽出度、その御繁昌は、朝日の昇るがごとくで御座るぞ、之を江戸表に在つて、見ぬまゐらせて居らるる、諸藩の心ある方々は、強う口惜き事に存ぜられて、モウ今に大石殿が、棟梁と爲らせられて、復讐の快擧あるであらふと、旱天に雨を待つごとき有樣で御座るじや、左るに其の心掛は、毛ほどもなく、誰に遠慮も仕たいまゝの遊蕩三昧とは、お身亂心めされたか、亂心ならば拙者の意見を用ひて、本心に立ち歸り、亡君の御無念を、晴さるるお考えを廻らされひ、若し又た本心より出でたる、斯のごとき亂行とならば、只今も申し上げたる通り、武士は相身互ひ、聊か所存も御座る儀に御座れば、と、鐵扇片手に云ひ出でたる喜劍の氣相は、怖ろしく變つてゐて、サア心を定めて返答あれと、ジリジリッと詰め寄る、形勢一轉して其の武家の名のごとく、甚だ危險である、との洒落どころの騒ぎではないのである。

○烈士喜劍の大義

この有樣に女どもは、如何なる珍事の生ぜむかと、驚き怖れる、大高源吾は兎も角もとするも、お招伴として附いて來てた、表向は嵯峨野邊の俳諧師、眞は吉良家の隱密なる其の男は、唯だモウ呆れ返つて、茫乎としてゐる、此れに反して顏色だに變ず、何にを云ふてゐるのやらと云ふ風にて、平氣の平左であつたのは、内藏助と小野寺十内の二人である、源吾は驚きも怖れも更々せぬのであるが、無禮なことを萬ケ一にも、いだしよつたら、其の分にては差し置かぬぞと、流石に年が若ひだけあつて、心を焦だつてゐた、而して仲居どもは太く怖れてか、源吾の周圍に一ト圍りと爲つてゐる、喜劍はサア返答あれ、

大石どのと、いよ〳〵迫つて來る、内藏助は醉眼を擦りながら、何んと思ふてか、前に在つた、飲み掛の酒を飲み干して。

『此れは又た御親切に、能ふお訊れ下された、なれど其の樣な怖ろしい、お訊れを戴くと、身許強う迷惑をいたす、と云つてお答へ申し上げなんだなればお身又た御立腹で御座らふほどに、然らば御答辯いたさんが、お身のお眼、世間での噂は、亂心と見へもし、云ひもされてゐませうなれど、眞は本心からで御座るじや、内藏助亂心いたしての遊蕩では御座らぬじや、只今も申せし通り、長い浮世に短かき生命、兎も角も送れるだけ、面白可笑く茶屋酒を飲んで暮らそふと存ずるので御座る、併し喜劍どのとやら、御心配は御無用に願ひたい、拙者は金の成る木を持參いたし居らぬ、其れゆえに、一二年も斯樣な遊びを續け申したら、金が盡るで御座らふて、金の盡き目が緣の切れ目、その時には嫌でも應でも、止み申す、先づ其れまでは拙者の遊興は、誰れが何んと申さ

れても、止みませぬわひ、アハ、、、、、、

『其れでは遊興は、お身本心からで……

『はてさてお疑り深ひ、本心から祇園の花に醉ひ申したに、お身は何故あつて其を其樣嚴しゆふ、御詮議召さるるかな。

『アヽ……呆れ果たり、赤穗の御家老大石良雄殿は、精忠無比の士じや、必らず今に復讐の快擧を企たてられて、亡者の御無念を晴せらるるに相違ないと諸藩の方々が望みを屬してのお噂は、全くお身を買ひかぶつてのことで御座つたか、イヤハヤ呆れ果たる不忠……と云ひかゝつたが、俄かに言葉を改ため

『確か昨年の秋ごろで御座つた、去る確かなる方より、お話を承はつたに、お身は御家中の義士方と心を合せて、復讐のことを企たて居らるるやに御座つたが、今は色酒に其の心も失せ申したと見へまするな。

『成るほど、其の節は亡君の御無念を、お察し申し、又た斷絶せしお家のこと

を悲しみて、一筋に吉良上野介を恨み申し、其の白髪首頂戴いたそふかと存じた、なれど、魚の首を切り、人形の首を拔くやうな譯にはまゐり申さぬ、で何うしたら可からふかと、黒案をいたして居る中に、全然と悟を開き申したので御座るじや。

『ナニ……悟をとな……シテ其の儀はと詰め寄る。

『左ればで御座るじや、仇討をゐたしたならば、天下の人々には、忠義者よと唄はれ、天晴れ武夫の龜鑑そと褒められ、拙者等の名譽はこの上もなく、又た此の右に出る武士の果報は御座らぬ、なれども肝腎要の生命が御座らぬ、其れもお家が斷絶せず、御舍弟の大學どのにでも、御相續いたされて居られたので御座らば、さても感心なとあつて、遺族の者どもへ、其々應分の御保護を下さるるで御座りませう、なれど其れも叶はぬこと、左れば我々は犬死をいたされば爲りませぬ、其れゆへに仇討などと云ふ、生命を棄つてかゝる仕事は、

先づ止めにしやう、緣あつて此の世に生れて來た、身一日でも長生をして、些とでも多く面白い思ひをするが當世と、斯ふ悟を開いて、フツヽリと仇討のことは思ひ切り、其れより此の通り祇園の花に醉ふて居るので御座るわい、アハヽヽヽ……と言語道斷なる不條理の言葉に、喜劍は滿面に血を迸らせて、ガツバと怒り。

『果れ果てたる不忠者……犬にても、三日飼るれば主の恩を忘れぬと云ふに、代々別して厚恩を辱なふせる身でありながら、君恩を沒却するとは、お犬猫にも劣りし魂性じやな、人面獸心と云ふことがあるが、實に其方のやうな腐れ武士のことを云ふたのであらふわい、さても汚らはしやと、鐵扇を其のまゝ帶に挿めば。

『お身モウお歸りかな、何んの愛想もなふて、お氣の毒で御座つたな、アハヽヽヽ……薩州の武家は、兎角に堅くるしゆふて困る、ヤレヤレ醉ひが強う廻

つてまゐつた、ドッコイシよと、云ひつゝ内藏助は我が傍にゐる、小倉太夫の膝を枕にして、其處へコロリッと横に爲つた。

『畜生にも劣りし性根の者なれば、武士の作法を忘れよつたも無理はない、斯も腐り果たる人物と知らずして、言葉を交したは口惜しい、ドレ我が身の汚と爲らぬ中に、立ち去らふと、起ち上つて、ポンポンと袴の襞を二つ三つ兩手にて叩ひたが、ホヽ左樣〳〵、畜生より受けた盃がある、之を返さぬは武士の作法でない、と云いながら、喜劍は黑塗に金蒔繪の施こしてあつた其の一合入りの大盃を、眤と諦視ながら。

『誠の道より云へば、武士道の手前、拙者が内匠頭殿に爲り代り、一刀の下に斬り棄つべきではあるが、今日は畜生を斬る庖丁を持參いたさなんだが、其方の仕合じや、ドリや盃を返して參らふと、右の足にて其盃を、はさんで内藏助イヤナニ大武士、返盃じや受けいと、グヒッと内藏助の腹こんでゐる

口元へ、其の足を突き出した。

此れには流石の内藏助も、ムカとしたが、忽ちアハヽヽヽ……と高笑ひに紛らせて、御返盃で御座るか、確かにお盃お受けいたしたと、寢轉んだるまゝ、右の手を突き出して、其の盃を受取る。

この無禮極まる擧動に、大高源吾　モウ辛抱が仕切れなくなつてか、癇癪の皆をキリッ……キリッと釣り上げ、只一本落し差にして來た、枕刀に手をかけて、立ち上らんとするを、先の程より、無言のまゝにて、其の容子を眤と眺めてゐた、小野寺十内が、早くも認めて、源吾の顏を尻目で、ツッと睨みつけて、早まるなと云ふ謎を示めしたから、源吾は無念の切齒を爲しつゝ扣へた、すると喜劍は尙も。

『寢ながら盃を受けた其の狀は、いよ〳〵畜生じや、序手に肴も取つてやらふわいと、片脇にあつた肴を皿ぐるみ、足にて、はさんで、内藏助の口許へ突

き出しつゝ、アハヽヽヽ……哀れな狀じやと、云ひ棄て彼は圓山の方へ立ち去る、女どもは呆れ果る、源吾は悔し涙を漏しつゝ、其の後姿を睨みつけてゐた、涼しい風は何んにも知らぬかのごとく、ソヨソヨと吹ぬけてゐる。

喜劍は島津家の家中にて、殊に忠義の心あつき烈士であつたのである、其れ故に、內藏助が遊蕩に耽つてゐるのを、敵に油斷さすべき、反間苦肉の計略とは露悟らず、改心させて、復讐の快擧を決行させむものと思ひて、圖らずも此處に會ふたを幸ひに、斯のごとき擧動に及んだのであつた、然るに後に至りて內藏助が亡君の仇を美事に復した、祇園の花に醉ふてたのが、深き考えあつての反間苦肉の計略であつたと云ふことを、國元にて聞きて知り、アヽ誤まり、深きお考えあつての事とは知らずして畜生取り扱かひになしたる我が淺慮さよと、後悔の念にかられて、內藏助に謝罪なさんと、暇を乞ふて江戸へ來たが、此の時は內藏助等四十七士は、既に切腹を仰せつけられて此の世にあらず

こゝに於てか事の次第を主君に申し出で、我が家の仕末を其々つけて、泉岳寺なる內藏助の墓前に赴き、切腹なして、當時の無禮を謝したと云ふことである。

此の事蹟は改正の尋常小學讀本卷の十二に、烈士喜劍と云ふ題を設けて、其の志の崇高にして義に厚き、日本魂のほどを、兒童に敎えんとて、文部省は特に敎科書中に選んで載られたのであつた、余事を申し上げて恐れ入る、此れより本文に移る。

○近松勘六山科に來る

內藏助の志慮遠大にして、用意の周到なりしは、其の至誠純忠と相竝らびて實に古今其の例を見ず、左ればこそ上杉家と云ふ、大なる後援ある吉良上野介義央の首級を討ちて、亡君が冥途の無念を晴して、節に斃れたのであつた烈士喜劍が內藏助に與へたる侮辱は、喜劍の意中を知らざるもの、眼より見た

らむには、實に言語道斷である、內藏助の狂氣じみたる所作に、加ふるに喜劍の狂氣じみたる擧動あり、東山の靈、若葉の精、之を見て抑も何人と感ぜしか一方は遠大の素志を達せんとして、殊更に狂氣を衒ひ、一方は至誠の熱情迸ばしつて、狂氣の沙汰と爲る。

內藏助は一時、ムッとしたが、此の侮辱こそ天が我々の義心に感じたまひて、他處ながらの保護を與へ給ふになむと思ひ、彼れが爲すまゝに從がふたが、果して其の通り、其席にゐた俳諧師に化た、穩密は、一部始終の容子を視て、モウ全然と內藏助の心膽が腐つてゐると思ひ、此れならばモウ安心なり、仇討のことなぞは思ひも寄らずと、其れより京都へ入り込んでゐた穩密は、悉く江戸へ引き上げたのであつた。

此に於てか、內藏助は喜ぶ、小野寺十內も喜ぶ、又た大高源吾も喜ぶのであつた、なれども內藏助は放蕩を止めぬ、此れは穩密が京都を引き拂つたから

とて、油斷は出來ぬ、俄かに止めたらば、其れこそ不審を起さする基と、斯樣考へてたからである。

賴む……と內藏助が、山科の閑居の內玄關に、訪ふて來た者の聲がする、今表坐敷にて、午睡より起き、茶を喫んで心氣を鎭めてゐた、武林唯七が、其の訪ふ聲を聞きつけて、誰も居らぬのか、ハヽア……午睡をいたして居ると見ゆるな、一匹の馬が狂へば、千匹のと云ふ喩があるが、實に其の通り、內藏助殿が內を外なる亂行に、召使ひどもまでが馬鹿にいたして、訪ふ方のあるに氣もつかずにゐらるとは、さても情なきことではあると、斯樣ことを獨語ながら、仕方がないから、ドーレ……と云ふて出てみると、旅裝束の近松勘六が突つ立つてゐるので。

『よ……お身は近松姓では御座らぬか……ホヽ……お身は武林殿、お久し振で御座つたのう……

此れは吉田忠左衛門より、内藏助へ渡すべき書面を受け取り、其の使者として近松勘六が、態々江戸表より、今この山科へ來たのであつた。

其れより勘六は、足を洗ひ、而して唯七の案内にて、表坐敷へ通り、互に一別以來の挨拶を終りたる時に、赤穗より内藏助が特に伴れて來てゐた、例の小間使のお花が、お茶を持つて來た、

『大石殿は、御在宿で御座るかなと、勘六の訊れに、イヤ一昨日お出掛なされた切り、未だにお歸りは御座りませぬじやと云ふて、唯七は太き呼吸を吐く、内藏助は相も變らず、殊更の遊蕩を慾にしてゐると見ゆる。

『一昨日お出掛なされた切りとは、お身大層に御緩りで御座るが、何方へお越しなされたので御座つたかなと、勘六は江戸に許り居るからして、斯までに甚だしき亂行を續けてゐたとは、全く以て知らなんだのであつた。

『何方かへは身許も存ぜれど、大方島原の月か、祇園の花に狂ふて居らるる

ので御座らふて、實に情けなきことで御座るじや。

『ウム……大石殿が、色町の酒に心を狂はし出されたと云ふことは、身許江戸にゐて、薄々聞ゐて存じて居つたが、其れでは近頃は、强う迷ふて居らるると見へまするな。

『如何にも左樣で御座る、實に言語道斷なる御亂行、その概略のほどお物語りいたしませうほどに、驚かせたもふなよと云ふてゐるところへ、お花は唯七の云ひ附けなるか、酒と肴を運び出した。

『お花どの、お給仕には及ばぬ、拙者と近松姓と、互ひに物語りいたしながら、手酌で緩々と傾くるほどに、用があれば手を叩く、其の節には來て下されよ、畏まりまして御座りまするじやと云ふて、お花は退く。

唯七は内藏助の亂行の數々を、委しゆふ物語りて、さて言葉を改めつゝ、而してな、先づお聞き下され、實に腸の千々に引き裂るるやうな、悔しいこと

が御座つたのじや、其れは丁度二十日ほど前に、東山にてと、唯七は内藏助が喜劍に、畜生扱ひにされたる、言語遣斷の侮辱を、京都にて全然と聞き出して來てゐたものとみへて、其の在りし一部始終を、全然と物語つた、勘六は始めて聞ゐて餘りのことに呆れ返つてか、無言のまゝにて、睨と唯七の顏を諦視てゐたのであつた。

『だに依つて、お身拙者は復讐のこと、覺束なふ存ぜられて、氣をくさらせて居るので御座るじやと、力なげに云ふて、又た吐息つく。

『其れは實に言語道斷の御亂行又た小野寺十内殿までが、御一所とは、イヤハヤ呆れ果て、御座るな、何には兎もあれ物堅ひ方々に、似合しからぬ御亂行……はて合點のまゐらぬ儀じ御座るなア……

『其れに殊に氣にくわぬは、大高源吾どのが、御一所に相成つての遊蕩、假し大石どのがお誘ひあそばされたにもせよ、本來から云へば、御意見申し上げ

れば相成らぬのに、可いことにして、御一所に遊ぶとは、何んとお身呆れるよりは、打ち棄て置かれぬ儀では御座りませぬかな。

『ホヽ……如何にも、左樣で御座りまするじやな、源吾どのまでが、一所に爲つて遊ぶとは、是りや何んとか考えねばなりませぬなと、其れより内藏助の噂さ、源吾の身持に就いて、何んの彼のと賴母敷二人は、相談に餘念なかつた、其の中に左しもに永き夏の日も、早や西に傾く、二人はホンノリと醉ふて、此に風呂が湧いたとの知らせに、汗を流して、夕風の通ふ椽端に休息してゐたが内藏助は未だ歸つて來なゐ。

灯は點される、蚊遣は運ばれる、勘六は旅の疲はあれど、暑が嚴しいので、宵からは寢られない、デ、唯七と二人椽端に對坐となつて、種々と話をしてゐる、勘六は冴え渡つてる空に、幾萬と限なく妙なる光を放つてゐる星を眺めながら、唯七どのモウ彼れ是れ、亥の刻で御座りませうかな……左樣で御座

るなと、云ひつゝ唯七も亦た星の容子を眺めつゝ。

『イヤ未だ亥の刻には、早う御座らう、天の川の容子では、戌の刻半頃で御座りませうか、天の川とは夜の更くるに從ふて、段々と其の位置を變ずる、小星の一群のことである。

『今に内藏助殿、お歸りあそばされぬとあつてみれば、今宵もお歸りは御座いますまゐのう……吉田殿より、大切なる書面を預かつて參つたので、成らふことなら早う、お目に掛つて、お手渡しいたしたい、拙者が肌につけて居る中は何んとなふ氣がゝりで爲り申さぬ。

『デハ御座りませうけれど、亥の刻近くに爲るに、お歸り御座らぬ上からは、モウ如何なることあるも、今宵はお歸りは御座りますまゐ、左れば御緩り、お寢みなされて、旅のお疲をタップリとお休めなされ。

『左樣なれば是非に及ばぬ、臥るで御座らふと、其のまゝ臥床へ入つたが、勘六は樣々なことを、思案してゐたのと、寢馴れぬ場處とであつたので、一寸と寢付れない、三更頃に漸やく眠つた、其れや是れやで翌日眼の覺たのが、辰の刻、今の昨間で云ふ八時頃であつた。

なれども未だ内藏助は歸つてゐない、食事を濟ませて、勘六が休息をしてゐるところへ、唯七が入つて來て、勘六どの此の容子では、大石殿今日もお歸りは御座るまゐ、就ては昨夜お約束をいたして置ひた通り、其の在處をお搜しかたがた、京都へ參らふでは御座らぬかな。

『如何さま其れが宜しゆふ御座ろ、然らばお供いたしませうかなと、勘六は一時も早く、内藏助に會ふて、忠左衛門の書面を渡したい、而して使命を果されば氣がかりでならぬ、其れで斯は打ち伴れ立つて、京都へ出掛た、時に六月の下旬であつたのである。

○武林唯七の强談議

大高源吾は去んぬる春の半ば過ぎ、圓山の重阿彌の寮にて、内藏助、十内、惣右衛門の三人と、花見をかこつけに、會合して相談したことがある、其れ故に内藏助の打つて變りし亂行を、見るも決して怪しまず、深き成算あつての計略と思ふてゐる、其れだから、東山で喜劍の侮辱に出遇したが、併しその後その事に就ては、一言半句も内藏助に物語をせなんだ、此れは云ふまでもなく、内藏助の精神を見拔て、能く知つてゐるからであつた。

今朝しも源吾は、五條邊りの去る方へ、發句に呼ばれ、午の馳走を招伴して、暇を告げて戻つて來たが、暑さに堪えぬので、風呂へ入つて、今歸つて、而して今朝の俳句の點付をしやうと、机に向ひ、煙管片手に思案してゐた、折しも表の格子をガラリと開ける音がすると、賴む……源吾どの御在宿かなと、

大聲にて呼んだのは、武林唯七じあつた。

『何誰じやと、返答て源吾が其處へ出て來ると、唯七と勘六とが打ち伴れ立つて來て立つてゐるので。

『イヨー……此れは御兩所……打ち揃はれて、能ふこそお越しで御座つたな、サア何うぞ此處へ、通り下され、然らば近松姓御免蒙むるで御座らふと、揚り口より狹ゐ廻り椽を傳ふて、書齋へ通る。

『武林姓には、時々お目通りいたし申すが、近松姓には殆んど雜と一年振で、お目通りいたし申す、相變らずの御健勝、御元氣にて珍重の至りに存じ申す、幾時お上りで御座りましたかなと、云ひつゝ源吾は煎茶を出して、侑める勘六はジツと源吾の容子を眺めながら。

『お身も相變らずの御健勝にて、大慶の至りに存ずる、拙者昨日江戸表より罷り越して御座るじやと云つて、侑められたる茶を飲む。

『オヽ左樣で御座つたか、其れは其れは、炎暑の折から御苦勞に存じ申する、シテ吉田忠左衛門殿を始め、堀部姓、其の他の方々にも、炎暑のお障なく、一入の御元氣で御座りませうな……オヽー……御元氣が何により、先づお召し物を脱がれて、打ち寛ぎ下されと、源吾が會釋をする。

『大高姓、今日近松姓と御同道にて、お訪れいたせしに、篤くりと御意得たきことの御座つてと、唯七は言葉に强う力を入れて云ふ。

『で御座つたか、如何樣なる儀かは存ぜれど、仰せ聞けられて下さりませと、源吾は煎茶の盆を押し退けて、其の後へ我が常用の煙草盆を引き寄せる。

『外でもないが、吉田殿のお使者として、近松姓、昨日山科へお着で御座つた、然るに内藏助殿二三日前にお出掛なされた切り、今以てお戻が御座らぬ、其れ故にお身にお訊れ申せば、御座る處が知れやうかと存じて、斯は打ち伴れ立ちて罷り越したので御座るじや。

『身許とても大石殿の御座るところ、存じやう筈が御座らぬ、なれど三四日もお歸りないとあるからは、島原でなくば、祇園の一力に流連を、打つて居らるるので御座らふほどに、火急の御用事に御座らば、先づ一力へお越しなされみられひ、若し一力におぬであそばされずとも、必らずそのお越の所が知れませうほどにと、先づ思ふたまゝのことを云ふ。

『すりやお身は、内藏助殿のおはす所、御存じないと云はるるかと、唯七の言葉が慄へ出したのに、源吾は内心不審を抱きながらも左あらぬ體で。

『ハテ此れは迷惑な、身許が大石殿と御一所に、お歩き申してゐると云ふではない、左れば其のお在所存じやう筈が御座らぬ。

『大高姓、左樣は滅太に申させぬぞッ……と唯七の言葉は鋭く、而も一入慄へて、而して兩眼には血が迸じつてゐた。

『此れは異なことをと、源吾は少しく呆れる、唯七はジリ……ジリッ……とに